

沼夫人

泉鏡花作

—

「あゝ、奥さん、」

と言つた自分の聲に、ふと目が覺めると

室内は眞暗で黑白が分らぬ。寐寐てから大分の時
が經つたらしくもあるし、つい今しがた現々したか
とも思はれる。

其の現々たるや、意味の如く曖昧で、虚氣として
居たのか、茫乎となつて居たのか、其とも一寸寐た
のか、我ながら覺束ないが、

「あゝ、奥さん、」

と返事をした聲は、確に耳に入つて、判然聞こえ
て、はツと一ツ胸を突かれて、身體の何處かゞ、が
つくりと窪むだ氣がする。

其處で、此の返事をしたのは、能くは覺えぬけれ
ども、何でも、誰かに呼ばれたのに違ひない。——

呼んだのは、室の扉の外からだつた——即ち、
閨の戸を音訪れられたのである。

但し閨の戸では、此室には相應はぬ。寢て居るのは、凡そ十五疊ばかりの西洋室と云ふが、此の部落に於ける、ある國手の診察室で。

小松原は、旅行中、夏の一夜を、知己の醫學一士の家に宿つたのであつた。

隙間漏る夜半の風に、ひら／＼と裙の靡く、薄黒い、ものある影を、臆病のために嫌ふでもなく、然ればとて、群り集る蚊の嘴を忍んでまで厭ふほどこぢれたのでもないが、鬱陶しさに、餘り蚊帳を釣るのを好まず。

些や少との、ぶん／＼なら、夜具の襟を被つても、成るべくは、螢、萱草、行拔けに見たい料簡。其には持つて來いの診察室、裝飾の整つたものではないが、張詰めた板敷に、奈様にか足袋跣足で歩行かれる絨氈が敷いてあり、窓も西洋が／＼で、一雨欲しさうな、色の稍褪せた、緑の窓帷が絞つてある。これさへ引いて置けば、田圃は近くつても蟲の飛込む惱みもないので、窓も一つ開けたまゝ、小松原は、晝間は其の上へ患者を仰臥かせて、内の國手が聽診器を當てようといふ、寢臺の上。益々妙なのは蚤の

憂更になし。

地方と言つても、然まで邊鄙な處ではないから、望めばある、寢臺の眞上の天井には、瓦斯が窓越の森に映つて、薄ら蒼くぱつと點いて居たつけが、寢しなに寢臺の上へひよいと突立つて、捻つて、ふつと消した。

「何、此の方が勝手です、燧火を一つ置いといて頂けば澤山で。」

此家の細君は、未だ爾時、宵に使つた行水の後の薄化粧に、汗ばみもしないで、若々しい紅い扱帯、浴衣にきちんとしたお太鼓の帯のまゝで、寢床の世話をして、洋燈を其處へ、

「否、お馴れなさらないと、偶とお目覺めの時、不可いもんですよ。夫でもつい此の間、窓を開けて寐られるから涼しくつて可いてつて、此室へ臥りましてね、夜中に戸迷ひをして、それは貴下、方々へ打附りなんかして、飛んだ可笑しかったことがござんすの。」

可笑いより、貴下、ひよんな處へ顔を入れて、で

もまあ、男をとこでしたから宜よろしかつたやうなものゝ、私わたくしどもだつたら何どうしませう。其處そこにございます、それですわ。同おなじやうな切きれを掛かけて蔽おほひにして置くもんですから、暗くまさは暗くまし、扉とびらの處ところが分わかりませんので、何なにしろ、何處どこか一つ窓まどへ顔かほを出だして方角はうかくを極きめようとしましてね、窓掛まどかけだ、と思おもつて引揚ひきあげましたのが、其その蔽おほひだつたんでせう。箱はこの中なかに飾かざつて置おきます骸がい骨こつに、ぴつたり打撞ぶつかつたんでございますとさ、厭いやではござんせんかねえ。」

と寢臺ねだいの横手よこて、窓際まどぎはに卓子テーブルがあるのに、其その洋燈らんぶを載のせながら話はなしたが、中頃なかごろに腰こしを掛かけた、其その椅子いすは、患者くわんじやが醫師せんせいと對向さむかひになる一脚きやくで、「何なんほ、男をとこでもヒヤリとしましたさうですよ。」と愛嬌あいけうよく莞爾にっこりした。

「や、そりや、酒田さかたさん驚おどろいたでせう。幾いくら商賣しやうばい道具だうぐでも暗くらやみで打撞ぶつかつちや大變たいへんだ。」
「ですから、お氣きを注つけなさいまし。夫やととは違ちがつて、貴下あなたはお人ひとがらでいらつしやるから、又また然さうでもない、骸骨がいこつさんの方ほうから夜中よなかに出掛でかけますとなりません。婦をんなのだつて、言いひますから。」

主人の醫學一士は、實は健康を損ねたゝめ、保養
 旁々暢氣を專一に、此處に業を開いて居るのである
 が、久しぶりの此の都の客と、對談が發奮んで、晩
 酌の量を過したので、最う奥座敷で、ごろりと横の、
 其のまゝ夢になりさうな様子だつた折から、細君も
 唯其れだけにして、

「何うぞ御緩り。」

と洋燈を差置き、ちら／＼と――足袋ぢやな
 い、爪先が白く、絨氈の上を斜めに切つて扉を出た。

少時して、女中が入つて来て、

「此處へ、冷水をお置き申します。」

聲を聞いたばかり。晝間歩行き廻つた疲労と、四
 五杯の麥酒の酔に、小松原は最う現々で、何處へ水
 差を置いたやら、其は見ず。何時又女中が出て去つ
 たか、其さへ知らず。唯洋燈の心を細めた事は、一
 つ胸を緊めたほど、顔の上へ暗さが乗懸つたので心
 着くと、頓て、すう／＼汐が退く鹽梅に、灯が小さ
 く遠くなり、遙に見え、何だか自分が寐た診察臺の、

枕の下へ滅入込んで、ずっと谷底の古御堂の狐格子の奥深く点れたものゝ如く、思はれたか思つたのか、其とも夢路を辿る峠から覗く景色か、つい他愛がなくなる。

處を、前に言つた、（奥さん）——で目が覺めたが、眞暗、洋燈は爾時消えて居た。

枕を擡げて、

「唯今！」

威勢よく、（開けます）とやらうとする、其の扉の見當が附かぬから、臥床に片手支いたなり、熟と室の内をニしながら、耳を傾けると、其切り物の氣勢がせぬ。

「はてな、」

自分で、奥さん、と言つたのに、驚いて覺めたには覺めたが、誰に呼ばれたのか、能くは分らぬ。尤も、小松原とも立二とも、我が姓、我が名を呼ばれたのでもなければ、聞馴れた聲で、貴郎、と言はれた次第でもない。

とは言へ、呼んだのは確に婦で

然も目

のばつちりした　ー

「待て、待て、」

當人寢惚けて居る癖に、他の目色の穿鑿處か。け

れども、其の　　ばつちりと瞳の清しい、色

の白い、髪かみの濃こい、で、何なんに結ゆつたか前髪まへがみのふつく

りとある、俯うつむ向き加減かげんの、就中なかんづく、歴然ありくと目めに残のこるの

は、すつと鼻筋はなすぢの通とほつた

此處こゝまで來ると、此この家やの細君さいくんの顔かほではない。其

は最もつと愛嬌あいけうがあつて、此これは其それよりも品ひんが優まさる。

勿論もちろん、女中ぢよちゆうなどに似にやうはないと、夢ゆめか、現うつか、

朦朧もうろうと認みとめた顔かほの容かたちが、何どうやら恚かう、目め前に、矢やっ

張り其その俯うつむ向き加減かげんに、ちらつく。従したがつて、今聲いまこゑを

出だした、奥おくさんは誰たれだか知しれるか。

其上その上に、夢中むちゆうで感かん覺かくした意い味みは、誰たれか知しらず、其

の女性にょせいが、

「開あけて下ください。」

と言つたのに應じて、唯今、と直ぐに答へたのであるが、扉の事だらう？ 其の外廊下に、何の沙汰も聞えないは、待て、其處ではなさう。

「他に開ける處と言つては、窓だが、」

扱は正しく魔された？ 此の夜更けに、男が一人寝た部屋を、庭から覗込んで、窓を開けて、と言ふ婦はあるまい。

いや、無いとも限らん。――有れば急病人の許から駈着けて、門を叩いても、内で寝入込んで、車夫をはじめ、玄關でも起きない處から、等閑な田舎の構、何處か垣の隙間から自由に入つて来て、直ぐに脊伸で覗いた奴。

かとも思つたが、何方を視ても、何も居らず、何處に窓らしい薄明りも射さなければ、一間開放した筈の、帷の戦ぎも見えぬ。

カタリとも言はず 剩へ西洋室の、犇とあり、寂として、芬と、脳へ染る。強い、濕っぽい、

おも
重くるしい薬くすりの匂におひが、形かたちある箔はくのやうに颯さつと來きて、
時ときにヒイヤリと寢臺ねだいを包つむ。

渠は、今更ながら、しとゞ冷汗になつたのを知つた。

窓を開けたまゝで寐ると、夜氣に襲はれ、胸苦し
いは間々ある習で。何うかすると、青い顔が幾つも
重つて、隙間から差覗いて、ベソを搔いたり、ニタ
ノと笑つたり、キキと鳴聲を立てたり、其中には
鼠も居る。――希代なのは、其の隙間形に、怪
しい顔が、細くもなれば、長くもなり、菱形にも圓
くもなる。夕顔に目鼻が着いたり、摺木に足が生え
たり、破障子が口を開けたり、時ならぬ月が出でな
どするが、例へば雪の一片毎に不思議の形があるや
うなもので、いつれも睡眠に世を隔つ、夜の形の斷
片らしい。

すると、今見た女の顔は
何に憑いて露
れたらう。

「何だか美しかった。」
と思出して、今度は悚然とした。

「而して、奥さんだ？」

奥さんとは何處

の奥さんだ。」

確かに此家の細君の顔ではない、彼でなし、其でもなし、目がぱつちりして、色が白く、前髪がふつくりと、鼻筋通り、と胸の裡で繰返して、其の目と、髪と、色艶と、一つ一つ絡まり掛けると覺がある！

トンと寢臺に音を立て、小松原は眞暗な中に、むつくと起きた。

「馬鹿な。」

と思はず呟いた。

「何、そんな奴があるものか。」

否、否、若し其の人だとすれば——三年前

に別れてから、片時も想はずには居らぬ、寐た間も忘れはしないのであるから、幻も、其の倂は當然で、却つて不審くも凄くもない筈。

「開けて下さい、」

と云つた
然矣々々、扉を開けるつもり

で、目を覺したに違ひはない。

且つ現から我に返つた、咄嗟には、内の細君で

返事をしたが、慥の通り、續いて些とも音

沙汰のないのを思へ。對手は何でも、小松原自分の

目には、皆胸にある、其の人の俤に見えるのかも知

れぬ。

「何處を、何を開けて、と云つたんだらう。」

一體　　―　と渠は又熟と考へた。

既に夢だと承知しながら、尚何か現在に、事を連絡させようとして居る内が、其の實、現だつたものらしいが。

窓は開いて居るし、扉の外は音信は絶えたり、外に開けるものは、卓子の抽斗か、水差の蓋

否、有るぞ、有るぞ、棚の上に瓶がある。瓶も

四つ五つ竝んで居たらう。内の醫師が手に

かけたと云ふ、嬰兒の酒精に浸けたのが、茶色に紫

がゝつて、黄色い膚に褐斑の汚點が着いて、ぐたりと成つて、狗の兒か鼠の兒か一寸は分らぬ、天窓のひしやげた、鼻と口と一緒に突き出た不状なのが、前のめりにぶくりと浮いて、膝を抱いて、呀！と一つ聲を掛けると、でんぐりかへしを打ちさうな、彼是大小もあつたけれども、何が七月兒か、六月兒か、晝間見た時、醫師の説明を能くは心にも留めて聞かなかつたが、海鼠のやうな、又其の岩のふやけたやうな、厭な膚合、ぶつりと切つた胞衣のあとのおほきな疣に似たのさへ、今見る如く目に残る、然も三個。

と考へ出すと、南無三寶、最一つの瓶には蝮が居たぞ、くる／＼と蝮曷を巻いた、胴腹が白くよぢれて、ぶるツと力を入れたやうに横筋の青隈が凹んで、逆鱗の立つたるが、瓶の口へ、ト達く處に、鎌首を提げた一件、封じ目を突出る勢。

「一口何うかね。」

と串戯に瓶の底を傾けて、一つ醫師が振つた時、底の沈澱がむら／＼と立つて、煙のやうに蛇身を捲いた哩。

場所ばしょが場所ばしょで、扱あつかふ人ひとが扱あつかふ人ひとだけ、其その時ときは今いま思おもふほどでもなかつたが、扱さて恚いかう枕まくら許もとにずらりとなら竝ならべて、穩おたやかな夢ゆめの結むすばれさうな連れんごう中ちゆうは、御お一方ひとかたもいでお在いなさらぬ。

あゝ、悪い處わるいところへ寐ねたぞ。

中なかにも件くだんの長物ながものなどは、恚いかる夜更よふけに、兎ともすると、人ひとの眠ねむりを驚おどろかして、

「開あけて下ください。」

を遣やりかねまい、と獨ひとりで拵こしらへて、獨ひとりで苦笑くせうし
た。

四

寢覺の思ひの取留め無さも、酒精浸の蝮が、瓶の口をば開けて給べ、と夢枕に立つた、とまでになる、と結句可笑く、幻に見た婦の顔が、寐た間も忘れぬ其の人を、平時の通り現に見た、と合點が行くと、孰れ一先づ安心が出来たので、其のまゝ仰向けに、どたりと寝た。

急に起上つたのであるけれども、左まで慌しくもなかつたらしく、枕は思つた處に丁とある。此處で、枕の位置が極まると、寢臺の向も、室の工合も、方角が定まつたので、何の道暗がりの中を、盲目覗きではあるが、扉、窓、卓子、戸棚の在所などが確實に知られる。

上に、其の六月目、七月目の腹籠、蝮が据置かれ、た硝子戸棚は、蒼筋の勝つたのと、赤い線の多いのと、二枚解剖の圖を掲げて、隙間一面、晃々と醫療器械の入れであるのが丁度@搔卷の裾の所、二間の壁に押着けて、直ぐ扉の横手に當る。其處には明取

りも何にもないから、仄な星明も辿れないが、晝の
見覺は違ふまい。同じ戸棚が左右に二個、別に眞中
にずっと高いのを挟んで、其には眞白な切が懸つて
居た、と寝亂れた浴衣の、胸越に伺ふ
白い。茫と天井から一巾@落ちたが、四邊が暗くて、
其の何にも分らぬ
兩方の棚に、犇々と並
べた明晃々たる器械のありとも見えず、寂となつて
隠れた處は、雪に埋もれた關らしく、霜夜の刑場と
も思はれる。

旅行の袂に携へた、誰かの句集の中にもありさ
うなのを、偶然目に浮べたは可かつたが、忽ち、小
松原は胸を打つた。

本尊！ 本尊！ 夢を驚かした本尊は、やあ／＼
其の中に鎮座します。――然も婦の骸骨で、其
の眞白な蔽の中に、襟脚を釣るやうにして、ぶら下
げた、足をすつと垂れて、がつくりと俯向いたのが、
腰、肩、蒼白く繋がつて、是ばかり冷たさうに、夕
陽を受けた庭の紫陽花の影を浴びて、怪しい色を染
めたのを見た。

最^もう此^この上^{うへ}には、仇^{あだ}、情^{なさけ}、貴^{あなた}下^{わたし}、私^{わたし}も無^なさうな
形^{かたち}ながら、婦^{きん}と云^いふだけ、骨^{ほね}の細^{ほそ}りと、胸^{むね}の邊^{あた}も慎^{つづ}
ましやかに、頭^{おとがひ}を搔^か込んだ姿^{すがた}を、仔^し細^{さい}らしく視^{なが}めた
が、然^さして心^{こころ}した、と云^いふでもなかつたに、餘^よ程^{ほど}目^め
に染^しみたものらしく、晚^{ばん}飯^{めし}の折^{をり}から、何^どうかした拍^{ひゃ}
子^{うし}だつた、一^{ひと}風^{かぜ}颯^{さつ}と――田^{あな}舎^なは是^{これ}が馳^ち走^{そう}と云^いふ、
青^{あを}田^たの風^{かぜ}が簾^{すだれ}を吹^ふいて、水^{みづ}の薰^{かをり}が芬^{ぶん}とした時^{とき}、――
膳^{ぜん}の上^{うへ}の冷^{ひや}奴^{やつこ}豆腐^{とうふ}の鉢^{はち}の中^{なか}へ、其^その骨^{ほね}の何^どの邊^{あたり}
かゞ、薄^{うす}りと浮^ういて出^でた。

其^{それ}から前^{まき}は、寐^ねしなに細^{さい}君^{くん}が串^{じやう}戯^{だん}に、
「夜^よ中^{なか}に出^で掛^かけますかも知^しれません、婦^{きん}だつて言^い
ひますから。」

と笑^{わら}つたが、話^{はなし}が陽^{やう}氣^きで、別^{べつ}に氣^きにもならず寝^ね
た。處^{ところ}を、今^{いま}其^その婦^{きん}が來^きて

「ほい、蝮^{まむし}より、此^この方^{ほう}が開^あけてくれに縁^{えん}があ
る。」

いや、南^な無^む阿^あ彌^み陀^だ佛^{ぶつ}、縁^{えん}なんぞないのが可^いい、と
枕^{まくら}を横^{よこ}に目^めを外^そらすと、此^この切^{きれ}が又^{また}白^{しろ}い。襟^{えり}許^{もと}の浴^{ゆか}

衣たが白しろい。同一色おなじいろなのが、何なんとなく、戸棚とだなの蔽おほひに、ふはりの中なかだるみがしつゝも續つゞいて、峠たうげの雪路ゆきみちのやうに、天井裏てんじやうらまで見上みあげさせる。

小松原こまつばらは又肩またかたのあたりに、冷つめたい汗あせを垂たら々と流ながした
が、大分たいぶん @ 夜よも更ふけた様子やうすで、冷々ひや／＼と、聲こゑもない、
音おともせぬ風かぜが、そよりと來きては咽喉のどを掠かすめる。

ごほんと、乾咳からせきを咳せいて、搔卷かいまきの襟えりを引張ひっぱると、
暗くらがりの中なかに、其その袖そでが一ひと波打なみつて煽あふるに連つれて、
白しろい蔽おほひに、襜ひだが入はいつて、何なんだか、呼いき吸きをするやう
に、ぶる／＼と動うごき出だす。

目めを塞ふさいでも、こんな時ときは詮せんがないから、一層いっそう又
起直おきなほつて、確しかと、其その實じつは蔽おほひが見みえるのでもなく、勿もち
論ろん揺ゆれるのでもない、臆おくびやうまなこ、病眼びやうまなこが震ふるへるのを、見定みさだ
めようと思おもつたが、頭あたまが重おもいのに、瞼まぶたがだるく、耳みみ
が鳴なる。手足てあしもぐつたりで、其その元氣げんきが出でぬ。

まゝよ、寝ねて了ちまへ！ ぐツと引被ひつかぶると、開あいたの
か、塞ふさいだのか、分ぶん別べつが着つかぬほど、見みえるものは

矢張見えて、お剩まけにに、其その白しろいものが、段々だん／＼擴ひろがつ
て、前まへへ出でて、押立おったつて、まざ／＼と屏風びやうぶを立たてた
やうに寄よつて來くる。

さあ、其の、ふは／＼と縦に動く白いものが、次第低に、耐力なく根を抜いて、すつと搔卷の上へ倒れたらしい心地がすると、犇々と重量が掛つて、うむ、と壓された同然に、息苦しく成つたので、急いで、匆退けに懸ると、胸に抱合はせて居る手が直ぐは解けず、緊着けられて居るやうな。

腕を引つこ抜く勢で、ニいて、搔卷をぱつと剥ぐ、と戸棚の蔽は、舊の處に茫乎と下つて、何事も別條はない。が、風が又何處からか吹いて来て、濕つばい、蒼臭い、汗蒸れた匂が、薬の香に交つて、むら／＼と其處等へ泳ぎ出す。

疲れ切つた脳の中に、其の臭氣ばかりが一つ一つ別々に描かれて、あゝ、濕つぽいのは腹籠りで、蒼臭いのは蝮の骸、汗蒸れたのは自分であらう。

其臭氣を見附けたさうに、投出して居る我が手をはじめ、きよろ／＼とニす内に、何となくほんのり

と、誰だか、婦の、冷い黒髪の香がしはじめる。

香のする方を、熟と見ると、唯矢張り白い

が、思ひなしか、其の中に、何うやら薄墨で影がさして、亂しもやらず、ふつくり鬢が纏つて、濃い前髪の形らしく見分がつく、と下から捲上がる如く、白い切が、くる／＼と小さくなり、左右から、きり／＼と緊つて、細くなつて、其の前髪を富士形に分けるほど、鼻筋がすつと通る。

「奥さん！」

と思はず言つて、小松原は又目を覺した。

トも未だ心着かないで、

「今、開けます。」

と言つて、愕然として我に返つた。

「又、夢か。」

今度は目が覺めつゝも、未だ、其の倂が室の中に朦朧として残つたが、吻と吐く呼吸にでも吹遣られるやうに、棚の隅へ、すつと引いて、はつと留まつて、衝と失くなる。

後が忽ち眞暗になるのが、白の一重芥子がばらりと散つて、一片葉の上に留りながら、ほろ／＼と落ちる風情。

「こりや、何うかして居るな。」

現と幻との見境さへ附きかねた。其の上、寒氣はする、頭は重し、いや、耐らぬほど體が怠い。夜が明けたら、主人の一診を煩はさうまでは心付いたが、先刻より、今は起直る力がない。

特に我慢のならぬのは、呼吸苦しいので、はあ／＼耳に響いて、氣の怯けるほど心臓の鼓動が烈しくなつた。

手を伸ばすか、何うにかすれば、水差に水はある筈、と思ひながら、枕を乗出すさへ億劫で、我ながら随意にならぬ。

丁ど、此の折だつたが、ぴしよ／＼、と水の滴るやうな音がし出した。遠くで蚊の鳴くのかとも聞えるし、鼠が溢したかとも疑はれて、渴いた時でも飲

みたいと思ふやうな、快い水の音信ではない。

陰氣な、鈍い、濁つた――厭果てた五月雨の、
宵の内に星が見えて、寢覺に又糠雨の、其の点滴が
黴びた疊に浸込む時の――心細い、陰氣でうん
ざりとなる氣勢である。

「水差が漏るのかな
亀裂でも入つて居たらう。」

「洋燈から滲出すのか」

可厭な音だ。が其にしては、石油の臭がするでも
なし 恚う精神が濠としては、ものゝ香は
分るまい。

斷念める積にしたけれども、其の癖矢張り、頻りに
臭ふ。濕つばい、蒼くさい、汗蒸れたのが跳廻る。

「ソレ又」

氣にすると、直ぐに、得ならず、時めく、黒髪の
薫が颯と來た。

「又夢か。」

何時^い時まで^つ續^つく、と最^もうげん^{なり}して、思^{かん}慮^{がへ}が、ド
ドと地^ちの底^{そこ}へ滅^め入り込^こむ、と今^{こん}度は、戸^と棚^{たな}の蔽^{おほひ}が
纏^{まと}つて、白^{しろ}い顔^{かほ}には成^ならない替^{かは}りに、窓^{まど}の外^{そと}か、そ
れとも内^{うち}か、扉^{ひらき}の方^{ほう}角^{かく}ではなしに、何^{なん}だか一つ、變^{へん}
な物^{もの}音^{おと} 沈^{しづ}んだ聲^{あしおと}音^{おと}。

其の音は　ー　今しがた聞え出した、何かを漏れて、雫の落ちる不快な響が、次第に量を増して、其の大きく成つたものゝやうでもあるし、新たに横合から加はつたものゝやうでもある。

何しろ、同一方角に違ひない。開けて

寝た窓から掛けて、洋燈が其處で消えた卓子の脚を傳つて床に浸出す見當で、段々判然して、ほたりと耳許で響くかとする又幽になる。幽に成つて外の木の葉を、夜露が傳ふやうに遠ざかる。ー　が、絶えたり續いたりと云ふよりは、出つ入りつ、見えつ隠れつするかに聞えて、浸出すか、零れるか、水か、油か、濡れたものが身繕ひをするらしい。

少時経つと、重さに半ば枕に埋んで、がつくりとした我が頭髮が、其のニ　ともつかぬ水分を受けるにや、じとりと濡れて、粘々とするやうに思はれた。最う、手で拂ふ元氣が無いので、ぶる／＼と振ると、これは！　男の天窓にあるべくもない

が、カランと、櫛の落ちた音

例のほた／＼零れる水と、頓て又縁が離れて、直ぐに新しい音がはじまり、寢臺の脚から搔卷の裾へかけて、恁う、一つ持上げては、踏落すも、爪先で擦るでなしに、宙を傳ふ裾から出て、踵が摺れ／＼に床へ觸るらしく、小股に歩行くほどの間を措いて、しと、しと、しと。

まさか是切に殺されもしまい、と小松原は投に出て、身動きもしないで居れば、次第に寢臺の周圍を廻つて、ぐるりと一周りして枕許を通る、と思ふと、ぐら／＼と頭を取つて仰向けに引落される　ー　はつとすると、最う横手へ退く。

其の内に、窓下の点滴が、益々床へ浸出しさうで、初手は、件の跽音とは、彼是間を隔てたのが、何時の間にか、一所になつて、一條濡れた路が繋つたらしくなると、歩行く方が、びしよ／＼陰氣に、濕つぽくなつて来た。

是では目が覺めて見ると、血の足跡が、飛々に残つて居ようも知れぬ。

飛々處か、何として、一面の血か、水であらう、と思はれたのは、間も無くであつた。

しと／＼云ふ尋常らしい聲音が、今はびちや／＼と聞えて來た。水なら踵までに浴らう深さ、而して小刻に疾くなつたが、水田へ踏込んで渡るのを畔から聞く位の響き。

と卓子の上で、ざゞつと鳴出す。窓から、どんどと流込む。―― 扱も扱も夥多しい水らしいが、瀧の勢もなく、瀬の力があるでもない。落ちてても逆捲かず、走つても迸らぬ。假へば用水が畔へ開き、田が一面の湖となる、雨上りの廣田圃を見るやうな、鮎と鱒の洪水めいたが、其のじめ／＼として、陰氣な、濕つばい、ぬる／＼した、不氣味さは、大河の出水の凄いに増る。

そんな水が何處へ出た、と言はれたら、此の部屋一面、答へようと思ひながら、小松原は但し身動き

も出来ないのである。

頓やがて短夜みじかよが 嬉うれしや、最もう明あけさうに、
窓まどから白濁しろにごりの色いろが注さして、どんよりと光ひかつて、卓てい
子ぶるの上うへへ翻ひるがへつた、と見みると、跽あしおと音が、激はげしくなつて、
ばた／＼ばた、と其處等そこいらを駈かけたが、風かぜか、水みづか、
ざつと鳴なる時とき、婦をんなの悲鳴ひめいが、

「あツ」
と云いふ

「奥おくさん。」
と匆はねあ起きる、と、起おきた正面しやつめんに、白しろい姿すがたが、髯ひつと
ある！

「あゝ、夢ゆめか。」
と氣きが附ついたが、まざ／＼垂たれた其その切きれが、ふつ
くりした乳ちちにも見みえるし、すつとした手てにも見みえる。
其邊そのあたりが、と思おもふと、圓まるい肩かたになり、なぞへに白しろく胸むね
になつて、くびつて腰こしになつて、すらりと裾すそのやう
になる。

あの、雪ゆきに、絲いと一條すぢも懸からぬか、と疑うたがへば、非あらず、
ひた／＼と身みに着ついた霞かすみのやいうな衣きぬをぞ絡まとふ。

唯と見みると、乳ちの邊あたり、胸むねへ掛かけて、無む慚ざんや、颯さつと赤あか
くなつて、垂たら々と血ちに染そまつた。

枕まくらに響ひびいた點滴したたりの音おとも、今いまさら此この胸むねからか、と
 悚然ぞつとするまで、其その血ちが、ほた／＼と落おちて、汐しほ
 が引ひくばかりに、見みる間まに、びしや／＼と肉にくが萎しぼむ、
 と手てと足あしに蒼味あをみが注さして、腰こし、肩かた、胸むねの隈くま々に、未ま
 だ其その白しろい膚はだが消きえ々に、薄うすらと雪ゆきを被かいで残のこりなが
 ら、細ほそ々と枝えだを組くんで、肋骨あはぢほねが透すいて見みえた。

「あゝ、是これだな。」

と合點がってんが行ゆく。

途端とたんに、がた／＼と戸棚とだなが鳴なつた。

自分じぶんで正氣しやうきづいたと、心こころが確たしかになつた時ときだけ、現うつ
 の婦をんなの蹠音あしおとより、此このがた／＼に最もう堪たまらず、矢庭やには
 に寢臺ねだいからずる／＼と落おちた。

小松原こまつはらは暗くらがりを手探てさぐりながら、鋭すくなつた神經しんけい
 に、先刻さつきから電燈でんきで照てらしたほど、室内しつないの見當けんたうは能よ
 く着つけて居ゐたので、猶豫ためらひもせず、ツシンと身からだ體たいこ
 と扉ひらの引手ひきてに持もつて行ゆくと、固もとより鍵かぎを下おろしたの
 ではない。

ドンと開く。

扉ひらに身からだ體たいが附くっ着ついて、發は奮ずんで出でたが、跨またいだ足あしが、然さう苦くなしには大おほ穴あなから離はなれうとはせぬので、地ち獄ごくから娑し婆やばへ踏ふ掛かけた體たいで、獨ひとりでもがいて、どたんばたん、扉ひらの面めんと、呀や、組くんだりける。

此この物もの音おとに、驚すは破やと奥おくで起おき直なほつて、早はや身み構がまをし
たと見みえる　　ー　　慌あわしい耳みみにも、尚なほがつたりと戸とだ
棚なの前まへの怪あやしげな響ひびきが又また聞きえたのに、堪たりかねて主ある
人じを呼よぶと　　ー　　向むかうへ、突つき當あたりの縁えんが折をれ曲まがつた
處ところに、ぽうと射さして居あた灯あかりが動うごいて、直すぐに臺たい附つきの
洋らん燈ぶを手てにした、浴ゆ衣かたの胸むねのはだかつた、扱し帶こぎのず
る／＼とある醫せん師せいが、右みぎを曲まがつて、正しやう面めんへ。

開あけ放はなした障しやう子じを洩もれて、ぶらりと裾すそを引ひいた萌も黄えき
の蚊か帳やを横よこにして、廊らう下かの八ぶん分め目めぐらゐな處ところで、

「便へん所じよか。」
と云いふ、鬚ひげ、口くち許もとが明あ々くとして、洋らん燈ぶを翳かす。

此この明あかりで、小こ松まつ原ばらは水みづ浸びたしになつたほど、汗あせびつ

しよりの、我ながら萎垂れた、腰の据らぬ、へと／＼に成つた形を認めだが、醫學一士は嘗て一年志願兵でもあつたから、武備も且つある、こんな時の頼母しさ。顔を見ると、蘇生つた心地で、

「やあ。」

と掛けた聲が勢なく中途で掠れて、

「夜更けに恐縮、」

と漸と根こそぎに室を離れた。

扉を後

ざまに突放せば、此處が當館の關門、來診者の出入口で、建附に氣を注けてあるさうで、勿返つて、ズーンと閉る。

と突出された體に悄乎立つて、

「何うも、何だ、夜夜中、」

醫師は亭主關白と云つた足取、深更に及んでも、夜中でも、其段は一切頓着なく、どし／＼と廊下を踏んで、やがて對向になる時、傍の玄關の壁越に凄じい躰を聞いて、

「壯だ、壯だ。」

と莞爾する。

顔色が、ぐつすり寝込んだ處を、今ので呼覺され

て、眠いに迷惑らしい様子もないので、

「何うも氣の毒です。酷い目に逢つてね。」

と聊か落着く。

醫師は立はだかりつゝ、

「何うした、蚊軍の襲來かい。」

なか／＼、こんな事を解釋する餘裕はなくなつて、

「えゝ、」

と如何にも氣が利かない。

「蚊に城を破られたかよ。」

「其處どころか。」

對手の餘り暢氣なのが、此の際怨めしく思はれた。

「此の中は大變だ。」

「大變だ？」

「何か來たんだ。」

「何、入つて來たか、」

と洋燈を上げて、扉の上を、ぐいと仰ぐ。

「がた／＼遣つてる。」

小松原は、づうつと醫師に身を寄せる、と目を返して、今度は其の體をじろ／＼視めて、

「震へてるね、君は。」

「何うだい、心持は。最う爽快したらう。」

主人の醫師は、奥座敷の蚊帳の中に、胡坐して、枕許の煙草盆を引寄せた。

「恚う云ふ時は、醫師の友達は頼母しからう。些と處方外の療治だがね、同じ葡萄酒でも薬局で喇叭を極めると、何となく難有味が違つて、自ら精神が爽快になります。しかし怯えたつけ、はゝは。」
と髯を捻つて、冴々しい。

蚊がぶうんと唸つて、齒切も何處かです。灯の暗い、鬱陶しかるべき蚊帳の内も、主人が是であるから、敢て蒸暑くもないのであつた。

小松原は、裾を細う、横に手枕で氣を休めて居た。

「怯えた處か、一時は其のまゝになるかと思つた。起きるには起きられず、遁げるには遁げられず、寢返りさへ容易ぢやない、實際息が留まりさ、うだつ

たものね。」

咽喉を斜に手を入れて、瘦せた胸を壓へながら、
「見給へ、いまだに此の動悸を、」

「色は白くつても、野郎の癩を壓へたつてはじまらない。は、は、いや、然し弱い男だ。」

「ふ、ふ、」

と力抜けた聲で笑つて、

「奥さんは？」 と俯向けに額を壓へる。

「御心配に及びません。君が侵入に及んだゝめに他室へ遠慮したと云ふんぢやない。小兒の奴が又生意氣に、私が些と飲過すと、酒臭い、と云つて一つ蚊帳を嫌ひます。いや、大に臺所の内諭なきにしもあらずだらうが。」

其處で、先刻、君と飲倒れたまゝ遠島申附かつた譯だ。――空鐵砲の機會もなしに、五斗兵衛むつくと起きて、思入があつたがね。其切目が冴えて寐られないで、聊か蚊帳の廣さかなの感あつた處で

す。

君も一寸は寐られまい、朝まで此處で話し給へ。」

折から陽氣にと云ふ積りか、醫師の言は、大に諧謔の調を帯びたが、小松原は唯生眞面目で、

「何うか然うしてくれ給へ。此處を追出されたればと云つて、二度と彼處へ行つて寐る氣はしない。

どうも驚いた。」

「はじめから奇を好むからです。彼處へ行つて寝るなんざ、何の道好くない。いつれ病人でなくつては乗つからない寢臺だもの。尤も、私にや大切な商賣道具だがね。

しかし其にしても餘な怯え方だ。夢を見て遁出するなんざ、苟も男子たるべきものがと云つて罵倒するわけぢやないが、些と確乎しないかい。串戯ぢやない、病氣になる。

そんなのが言じると、何も餅屋がつて、此處で病名は申さんがね、起きて居る眞晝間でも目に見える

やうになる。それ、現在目に見えて、其處に居るから、口も利くだらう、聲も懸けようではないか。傍から見ると、直ぐに最うキの字だぜ、恐るべし、恐るべし。

何も、朦朧と露れたつて、歴々と映つたつて、高が婦ぢやないか。婦の姿が見えたんだつて言ふぢやないか。何が、そんなに恐いものか。」

「別に見えたつて譯ぢやない。何だか寢臺の周圍を歩行いたんだが、然う、どつちにしても婦らしく思はれた。――其が直に、息の詰るほど厭な心地だつたのではないけれども、恚う、じと／＼して、濕つぽくツて、陰氣で、其處らに鯨でも湧出しさうな、泥水の中へ引摺込まれさうな氣がしたんで、骨まで浸透るほど慄然々々するんだ。」

と肩を細うして、背で呼吸をする。

「男らしくもない、そんな事を言つて梅雨期は何うします、まさか蓑笠を着て坐つてやしまい。」

「うむ、何、其が唯のじと／＼なら可いけれど、
今云ふ泥水の一件だ、轟と來た洪水か何かで、一思
に流されるなら未だしもです。――灯の消えた、
あの診察處のやうな眞暗な夜、降るともつかず、降
らないでもない、糠雨の中に、ぐしやりと水のつい
た畔道に打坐つて、足の裏を水田のぢよろ／＼流に
撥ぐられて、裾からじめ／＼濡通つて、それで動く
ことも出来ないやうな思ひを一度して見給へ。」
と力強く云つて、又小松原は溜息で居る。

醫師せんせいは徐おもむろに、煙草たばこ盆ぼんを引寄ひきよせて、

「それ、其處そこが苦勞くらく性しやうだと言いふのです。窓まどを開あけ
 たまんまで寝ねたから、夜風よかせが入はつて濕しめつぽかつたら
 唯たゞ濕しめつぽかつたで可よからう。何なにも眞暗まつくらな夜よる、田圃たんぼの
 中なかに、ぐしやりと坐すわつて、足あしの裏うらを擦くすくられて、腰こしか
 ら冷通ひえとほるとまで、こじつけずともことの事ことだ。其氣そのきでお
 膳ぜんに向むかつた日ひにや、お汁しるの湯氣ゆげが濛々もう／＼と立騰たちると、
 是これが毒どくのある霧きりになる、其處そこで咽死むせじに死しにかねませ
 んな。」

「然さう一概がいに言いつてくれる事ことはない。何どうせ現げん在ざい
 お目めに懸かけた臆病おくびやうです。其それを辯解べんかいするんぢやないが、
 田圃たんぼだの、水浸みづびたしだの、と誇大こたに妄まう想ざうした譯わけではあ
 りません。」

實際じつさい、そんな目めに逢あつて、一し生せ忘わすれられん思おをし
 た事ことがあるからだよ。いや、考かんへても身みの毛けが彌立よだ
 つ。」

の男をとこにばかり麻目あさめが蒼あをい。
フイと起返おきかへつて、蚊帳かやの中なかをニみしたが、妙めうに、此こ

醫師せんせいは落着おちついて、煙けむりを吹ふかして、

「何處どこで野宿のじゆくをした時ときだ、今度こんどの旅たびでか。」

「うゝむ、」

と深く頭かぶりを振ふつて、

「何時いつかの時ときさ、あの一件けんの

と言懸いひかけて、頬ほのこけた横顔よこがほになつて打背うちそむいた。」

――小松原こまつばらの肩かたのあたりから片面かためんの耳朶みゝたぶかけて、

天井てんじやうの暗くらさが倒さかに襲おそつたのを、熟ざつと見みながら、是これが

或婦人あるふじんと心中しんぢゆうしようとした男をとこだと頷うなづいた。

當時たうじ其その風説ふうせつは、友達ともだちの間あひだに誰だれも知らぬものはな

かつたが、醫學いがく一士しは、折をりから處ところを隔へたてゝ居ゐたので、

其その場合ばあひなにごと何事なにごとにも携たづはらなんだ。最もう三年ねんか四年ねんか

と、指ゆびを折をるほど前さきに、七十五日にちも通越とほりこしたから、

更あらためて思出おもひだすほどでもなし、おいそれと言ことばに従ついて、

極きまりの悪わるい思おもひをさせるでもなからう。で、一向かうむ無頓とんぢ

着やくに、

「何だい、何時かの一件とは？」

「面目次第も無い件さ。三年前だ、矢張り此の土地で、鐵道往生を爲損なつた、其の時なんです。」

「あゝ、そんな事があつたつてな、危いぢやないか。」

と云ふ内に自から眞心が籠つて、

「一思ひに好男子、粉にする處だつて。勿論が、私が恚うして御近所に陣取つて居れば、胴切にされたつて承合助かる。洒落に一寸轢かれて見るなんぞも異だがね、一人の時は危険だよ。」

故と話に、一人なる語を交へて、小松原が慚愧の念を打消さうとするつもりだつた。

處が案外！。此の情に、太く動かされた色が見えたが、面を正しう向直つた。

「何ともーー感謝する。古疵の惱を覚えさせまい、と然うやつて知らん顔をしてくれるのは眞に嬉しい、難有いが
それでは怨だ。」

ねえ。

あれほどの騒ぎだもの。特に自惚らしいが、私の事を忘れないで居てくれる君が、然も此の土地へ来て居て、知らないと言ふ法はない。承知の上で、何にも知らん振をしてくれるのは、矢張りあの時の事を、世間並に、私が餘處の夫人を誘つて、心中を仕損つた、と然う思つて居るからです。

勝手な事を言ふものには、言はして置いて構はんけれども、君のやうな人に對しては、何とも以て恥入るんだ。」

と俯向いて腕を拱き、

「其の君の情ある心で、どうか譯を聞いて欲しい。くだい事は言はん。何しろ、少なくとも君だけに言譯をする責任があると思ふ。」

醫師は潔く、

「承はらう。今更其の條道を話して聞かせる

惚氣なら受賃を出してからにして貰はうし、

愚癡なら男らしくもない、止したまへー ー だが、私たちが誤解をして居るんなら、大に辯じて聞かせ

てくれ、今まで疑つて居たから私にも責任がある。」

「然う、きつぱりとなられては、何うも又言出し
憎い。」

「可いぢやないか、其の容體を聞かせ給へ、醫師
には秘密を打開けて可いもんだ。」

「
」

言淀んで見えたので、此處へ來い、と構を崩して、
透を見せた頬杖し、ごろりと横になつて、小松原の
顔を覗込みつゝ、

「で、何か、其晩、田圃に坐つたのか。」
と軽く扱つて誘を入れた。

「まあ、坐つたんだ。」

小松原は苦笑して頬を撫でたが、寂しさうに打傾
き、

「上下坐をしたと言ふわけでもないが、矢張坐つ
て居たんだよ。」

「又何うしてだい。」

と醫師は寛いだ身の動作で、搔卷の上へ足を投げ
て、綴糸を手で引張る。

「其がね、」

と熟と灰吹を見詰めてから、靜かに卷筒を突込み
ながら、

「はじめは何でもない事だつた。――何の氣
なしに、あの人を、其處等へ散歩に誘つたんです。」

「あの人ツて？」

「はゝあ、相手の貴婦人だね。」

「そんな事を言はないで、」

と吸口を最つと突込む。

「可いぢやないか、何も貴婦人と云つたつて、直ぐに浮氣だ、と云ふ意味ではないから。」

「何、貴婦人に違ひはないが、其の對手が悪い。」

「可し、可し、黙つて聞かう。然う又一々氣にしないでお話しなさい。其處で。」

「御存じの通り、あの前の年から、私は體が悪くつて二年越此の田舎へ来て居たんだ。あの人は、私が世話になつてる叔父が媒酌人で結婚をしたんだらう。大して懇意ではないが見知越で居たのだつた。」

丁ど戦争のあつた年でね。

主人は戦地へ行つて留守中。其の時分、三才だつた健坊と云ふのが、梅雨あけ頃から咳が出て、鹽梅が悪いで、大した容體でもないが、海岸へ轉地が可い、場所は、と云つて此地を、其の主治醫が指定したと云ふもんです。

小兒の病氣とは云ひながら、旅館と來ると湯治らしく、時節柄人目に立つ。新に別荘を一軒借りるのも億劫だし、部屋借が出ず入らず、然るべき空座敷があるまいか、と私が此地に居た處から、叔父へ相談があつたと云ふので、世話をするやうに言つて來た。

其方此方聞合せると、私が借りて居た家から、田圃の方へ一町ばかり行つた處に、村ぢや古店で商も大きく遣つて居る、家主の人柄も可し、入口が別に附いて、一寸式臺もあつて、座敷が二間、此の頃に普請をしたと云ふ湯殿も新しいし、疊も入替へたのがある。

直ぐに極めて、其處へ世話をして、東京から來る時も、私が停車場へ迎ひに行つて、案内をしたんだつて、七月盆過ぎから來て居て、九月の末の事だつたよ。

五日ばかり降續いて、めつきり寂しくなる。朝晩は、單衣に羽織を被て、些と未だぞく／＼して、惡

い陽氣だとばかり、言合つて閉籠つて居た處

其日は朝から雨が上つて、晝頃には雲切がして、
何うやら晴れさうな空模様。でもまだ、蒼空は見え
なかつたが、多目ぶりで、出歩行くに傘は要らない。

小兒を歩行かせるには路が悪くから、見得張らな
い人だ、又おんぶをして、宿の植込の中から、斜つ
かひに私の前二階を覗いて、背中の小兒に言はせる
やうに、前髪を横向けにして、

「お出掛けなさいませんか。」
と濱を誘ひに見えるだらう。

「小松 君。」

と原抜きにして、高慢に仇氣なく高聲で呼ぶ、小
兒の聲が、最う其の邊から聞えさうだ、と思つたが、
出て来ない。

其の内、湯に入ると、薄りと湯槽の縁へ西日がさ
す。覗くと、空の眞白な底に、高くから蒼空が圍扇
をどけたやうな顔を見せて、からりと晴れさうに思
ふと、圍の外を、

「水が出たぞ。」

「田圃一面。」

と饒舌つて通つた。

是を聞くと、何か面白い興行でもはじまつたやうな気がして、勇んで、それは／＼して、早く行つて見たくつて、碌に手拭も絞らないで、ふらんねるを引かけたなり、帽子も被らずに、下駄を突掛けて出たんだがね。」

「汎水だ、と云つたつて、此の通り、川らしい川のない處だから、駈出して見物に行くほどの事もなさうなもんだけれど、私は何だ。」

董、茅花の時分から、苗代、青田、豆の花、蜻蛉、螢、何でも田圃が好で、殊に二百日前後は、稲穂の波に、案山子の船頭。芙蓉の靡く様子から、枝豆の實る處、些と稗蒔染みた考へで、深山大澤でない處は卑怯だけれど、鯨より小鮒です、白鷺、鶉、鶉、鶉、鶉、鶉、皆な我々と知己のやうで、閑古鳥よりは可懐い。

山、海、湖などがどが若し天然の庭だつたら、田圃は其の小座敷だらう。が、何しろ好きでね、其の所爲か、私には妙な事がある。

何時頃からかは能く分らんが、床に入つて、可心持に、すつと足を伸す、背が浮いて、他愛なく恚う、其の華胥の國とか云ふ、其處へだ——引入れら

れさうになると、何の樹か知らないが、萌葱色の葉の茂つたのが、上へかゝつて、其の樺色の根を静に洗ふ。藍がゝつた水の流が、緩く畝つて、前後の霞んだ處が、枕からかけて、睫の上へ、自分と何かの境目へ露れる。

ト其の樹の下に、箒か何か手に持つて、まあ、膝ぐらゐな處まで、其の水へ入つて、そつと、目高か鮒か、掬つてる小兒がある。其奴が自分で。――

あゝ、面白さうだと思ふと、我ながら、引き入れられて、身節がなえて、嬉しくなる。其の内に波立ちもしないで、水の色が濃くなつて、小濁りに濁ると思ふと、ずつと深さが増して、ふうはり草の生えた土手へ溢るんだがね、其の土手が、城趾の濠の石垣らしくも見えれば、田の畔のやうでもあるし、沼か、池の一角のやうでもある。其の邊は判然しないが、何でも、すつと陽炎が絡る形に、其の水の増す内が、何とも言へない可い心地で、自分の背中か、其の小兒の脚か、其に連れて雲を踏むらしく糶上ると、土手の上で、――此處が可怪しい――足の白い、綺麗な褌をしつとりと、水とすれ／＼に

内端に搔込んで、一人美人がイむ、と其と自分が竝ぶんで
此處まで來ると最う恍惚
すや／＼寝ます。

枕に就いて、此の見える時は、實際子守唄で賺かされるやうに寝られる。又眞個心持の可い時でない
と見えんから、見えない時でも見るやうに、見るやうにと心掛ける。――其でも、散らかつて、絡まらないで、更に目に宿らん事が多い。然う云ふ時は、屹と寝そびれて惱むんだ。

其處で、大好きな田圃の中でも、選分けて、あの、ちよろ／＼川が嬉しい。雨上りに些と水が殖えて、畔へかゝつた處が無類で。

取留めのない事だが、我慢して聞き給へ。――本人にも一向掴へ處はない。何時も見る景色だけれども、朝だか、晩方だか、薄曇つた日中だか、それさへ曖昧で、唯見える。

さあ、模様が詔向きと成つたらう。――處で、

一番近い田圃へ出るには、是非、あの人が借りて居た！ 其の商家の前を通るんだつたよ。

店をはづれて、ひよろ／＼とした柳で仕切つた、其の門を見ると、小兒が遊んで居たらしく、めんこが四五枚、散に靴脱ぎのたゞきの上へ散つて、喇叭が一ツ、式臺に横飛び。で、投出して駈出したか、格子戸が開放し、框の障子も半分開いて、奥の長火鉢の端が見えた。

其の格子戸の潜の上へ手を掛けて、

「健ちゃん、」

と呼んで見たが、黙つて居た。

「居ないの。お留守、」

と遣ると、其處も矢張開いたまゝの、

障子の陰の、湯殿へ通ふ向うの廊下へ、しと／＼と跼音がして、でも、默然で、一寸顔だけ見せて覗いたが、直ぐに莞爾して、縁側を奥座敷へ上つた姿は

帯おびなし、搔取かいどり氣味きみに褌つまを合あはせて、胸むねで引抱ひっかへた
手てに、濡手ぬれてぬくひ拭ひを提さげて居ゐた。二間ふたまを仕切しきつた敷居しきみ際ぎは
に來きて、又また莞爾にっこりすると、

「謹聽きんちやう、」

と醫學いがく一士しが唐突だしぬけに云いつた。

「眞面目まじめだよ、眞面目まじめだよ。」

「湯上りの、ばつと白い、派手な、品の可い顔を、ほんのり薄紅の注した美しい耳許の見えるまで、人可懐く斜めにして、

「失禮、今ね、お返事の出来ない處だつたの裸體美人、」

と云つて花やかな笑顔になる。如何にも伸々と寛容して、串戲の一つも言へさうな、何の隔てもない様子だつたが、私は何だが、悪い處へ來合せでもしたやうに、急込んで、

「田圃へ行つて見ませんか、」
と何のあしらひもなく装附けた。

『は、参りませう、』
と頷いて、臺所の方を振返りながら、
「一寸、御免なさいよ。」

支度を、と斷るまでもなく、平常着のまゝで出たが、――其の時、横向きになつて、壁に向ふと、手を離した。裙が落ちて、疊に颯と捌けると、

薄色の壁に美しく濡蔦が搦んで繪模様、水の垂りさ
うな濡毛を、くつきりと肱で劃つて、透通るやうに
櫛を入れる。丁ど其處の柱に懸けて、如何な姿見が
一面あつた。――勿論、東京から御一持參の品ぢ
やない。是と、床の間の怪しい山水は、家主のお愛
想なんです。――あの人が又旅へ姿見を持つて出
るやうな心掛けなら、何に、こんな處で、平氣でお
化粧をする事もなからう。

熟と見ても居られますまい。此の際、何處へ持つ
て行かうか、と背ける目を掠めて、月の中を雪が散
つた。姿見に映つた胸で、膚の
白い人だつけ。

直ぐに其は消えたけれど、今の其の襷はづれの色
合は、何うやら水際に足を白く、すらりと立つた姿
に見えたが

あゝ、其の晩方、幻のやうな形で、二人して、水
の上に立つやうになつたんだ。

何に誘はれて出たんだか、
—— 到頭あんな酷
い目に逢ふ原因だつたがね。別に怪しいものぢやな
い、自分が時々見る美しい、嬉しい夢、—— 否、
夢ぢやない、我が心に、誘出されたものかと思ふ。」

小松原は、現のやうに目を閉つて、今向直つて氣
を入れた、醫師の顔を瞻りながら、

「又愚痴だ、と言ふだらうが、後で考へれば、私
は今までの経験に因ると、何時でも、湯の中でフイ
と氣が立つて、何だか頻りにそはついて、よくも洗
はないで飛出した時に限つて、餘りめでたい事にな
い。一度も小兒の時だつた、矢張然う云ふ折に大怪
我をしたのを覚えて居る。」

其にね、そんな風で停車場へ迎ひに行つて、連れ
て来て、家も案内する、近所で間に合せの買物まで、
一所に歩行いて、臺所の俎、摺鉢の恰好まで心得て
るやうな關係に成つて居たから、夏の中も随分毎日
のやうに連立つて海岸へ行つたんで—— 又小兒
のために、其が何よりの目的なんでね。

来たてには、手荷物てにもつの始末しまつ、掃除さうぢの手傳てつだひかた／＼、馬丁べつたうと、小間使こまつかひと女中ぢよちゆうと、三人にんが附ついて来たが、煮炊にたきが間に合あふやうになると、一度ど、新所帯しんしよたいのお手料理れうりを御馳走ごちそうになつた。切り、其その二人ふたりは歸かへつた、年上としうへの女中ぢよちゆうだけ残のこつて。其それも戦時せんじの遠慮えんりよからです。

一人ひとりに成なつたが、女中ぢよちゆうには大たいした用ようがあるんぢやない。何どうせ旅たびの事ことで、何なにを極きまつて、きちやうめんにしなればならんと云いふでもなし、一向かうきど氣取きどらない女主人をんなあるじで夜よるも坊ちゃんぼつを眞中まんなかへ、一ツ蚊帳かやに寝ねるほどだから、お茶漬ちやくづけをさら／＼で、ぢやか／＼と洗あらつて了しまへば埒らちは明あく。女中ぢよちゆうも物珍ものめづらしく遊あそびたいから、手廻てまはしよく、留守るすは板戸いたどの開閉あけたて一つで往來ゆきの出で来る、家主やぬしの店みせへ頼たのんで、一足後あしおくれ馳はせにでも、坊ちゃんぼつ「何かなんかで、直すぐに追おつ着く。」

だから、何時いつでも女中ぢよちゆうが一所しよで、其その健坊けんぼうと四人にん連れ立だたないのは珍めづらしい、まあ、殆ほとんど無なかつたらう。

濱はまに人影ひとかげがなくなつて、海松みばかり打上うちあげられる、

寂しい秋の晩方なんざ、誰の發議だつたか、小兒が、
あの手遊のバケツを振提げると、近所の八百屋へ交
渉して、豌豆豆を二三合　　お三どんが風呂
敷で提げたもんです。磯へ出ると、砂を穿つて小さ
く圍つて、其處等の燃料で焚附ける。バケツへ汐汲
と云ふ振事があつて、一件ものをうでるんだが、波
の上へ薄りと煙が靡くと、富士を眞正面に、奥方も
些と參る。が、落日に對して眞に氣高い、蓬萊の島
にでも居るやいうな心持のする時も、何時も女中が
隨いて居たのに。」

「其が、其時に限つて二人切だつた。尤もね、

「健ちゃんは今？」ツて聞いたんだ。

「其處等に居ませう。」

と藤色の緒の表附の駒下駄を、紅の潮した爪先に引掛けながら、私が退いた後へ手を掛けて、格子から外を覗いた、門を出てからで可さうなもの、矢張雨に閉籠つた處を、四五日振りの湯上りで晴々して、戸外へ出るのが嬉しくつて、氣が急いたものらしかつた。

「帯も雑とした引掛結びで、

「おや、居ませんか？」

ツて蓮葉に出て、直ぐ垣隣りの百姓屋の背戸を覗込んで、

「健ちゃん、健ちゃんや。」

と呼ぶと、急に、わや／＼と四五人小兒の聲がして、向うの梅の樹の蔭で、片手に棒干切を持つて健坊が顔を出した。

田圃へお出で、と云ふと、

『厭だいいい。』

で突掛るやうに匆附ける、同じ腕白夥間に大勢馴染が出来たから、新仕込のたんべいか何かで、色も眞黒に成つた。母様が又是を大層喜んで居たもんです。

『ぢや遊んでるか。母様は運動に行つて来るよ。』

『うむ、』

と云ふと、わつと呐喊を上げて、垣根の陰へ隠れしたが、直ぐにむら／＼と出て、鶏小屋の前で、健ちゃん素飛ぶ。

『お庇様で、此の頃の悪い陽氣にも障らなくなりましたよ。』

と嬉しさうに見えて、

『何方へ？』

と聞く。

『踏切の方へ行つて見ませう。水が出たさうです

から。』

百姓家二三軒で最う暇だが、彼處は一方畑だから、
じと／＼濡れてるばかり。片方に田はあつても線路
へ掛けて路が高い爲に別に水らしい様子も見えん。
踏切を越して土手を畦傳ひに海岸の方へ下りると、
なぞへに低くなるから、其處へ行けばちよる／＼見
えよう。尤も汎水と云ふほどの事は何の道な
いのだから、暇を歸る百姓も、私たちのぶら／＼歩
行を超越す大八車の連中も、水とも、川とも言ふも
のはなく、がつたり通る。

路は悪かつた。所々の水溜では、夫人の足がちら
／＼映る。眞中は泥濘が甚いので、裙の濡れるのは
我慢しても、路傍の草を行かねばならない。

停車場は、それ彼處だからね。柵の中に積んだ石
炭が見える、妙に白光に光つて、夜になると蒼く燃
えさう。又あの町の空を、山へ一面に眞黒な、其の
雲の端が、白く流れ出して、踏切の上を水田の方へ、
むら／＼と斑に飛ぶ。が海を抱いた出崎の隅だけ朗
かな青空。でも、何だか、もう一拭ひ拭を
掛けたいやうに底が澄まず、丁ど海の果と思ふ處に、
あるかなし墨を引いた曇が互つて、驚破と云ふとづ

ん／＼押出して、山の雲と一絡めに又空を暗闇にし
さうに見える。尤も其なり夜にならうが、其だけに、
尚陰氣で、星は出さうにもなし、雨になると戸を閉
めるから、遠い灯の影も見られなさうな夕暮だつた。

「最う、お天氣になりませうね。」

「さあ、」

とは云つたが何うも請合ひかねる。

明

白に云ふと、此の上降續いちや、秋風は立つて來た
し、嘸厭き／＼して、最う引上げやしまいか、と何
だか其が寂しかつたよ。

風はなかつた。稲葉がそよりとせぬ。けれども
何となく、ざわついて海の波が響くやうなのは、溢
れた水が田へ被る其らしかつた。

踏切を渡ると、鴉が一羽 其の飛んだ事

つたら ー 吃驚したほど、頭の上を矢を射るや
うに、目を遮つて、低い雲か、山の端か、暗い處へ
消えたつけ 早や秋だつたねえ。雨氣が深
く包みはしたが、何の峰も姿が薄い。

最^もう少^{すこ}し隧^{とん}道^{ねる}の方^{ほう}へ行^ゆくと、彼^{あすこ}處^こに、路^{みち}の眞^ま中^{なか}に、
縦^{たて}に掛^かけた一^ち寸^{よつと}した橋^{はし}がある。棒^{ぼう}杭^{くひ}のやうに欄^{らん}干^{かん}が
ついで、一^い一^い彼^{あれ}を横^{よこ}切^ぎつて、山^{やま}の方^{ほう}から濱^は田^{まだ}へ
流^{なが}れて出^でる小^を川^がを見^みると、是^{これ}は又^{また}案^{あん}外^{ぐわい}で、瓦^{かはら}色^{いろ}に濁^{にご}
つたのが、どう／＼と唯^{たゞ}一^は巾^{ぎん}だけれども畝^{うねり}を立て、
橋^{はし}の底^{そこ}へすれ／＼に凄^{すさま}じいほど流^{なが}れて居^ゐる。平^い時^{つち}は
俯^{うつむ}向^むいて、底^{そこ}を見^みるのが、立^たつて、伸^{のび}上^あつて見^み送^{おく}
ほど、嵩^{かさ}増^まして、薄^{すく}の葉^はが瀬^せを造^{つく}つて、もう是^{これ}で充^{いつ}
満^{ばい}と云^いふやうに、川^{かは}柳^{やなぎ}が枝^{えだ}を上^あげて、あぶ／＼遣^やつ
てた。
「

十四

「此の水が、路端の芋大根の畑を隔てた、線路の下を抜ける處は、物凄い渦を巻いて、下田畝へ落ち懸る線路の上には、ばら／＼と人立がして、明い雲の下に、海の方へ後向に、一筆畫の墨繪で突立つ。蓑を脱いで手に提げて鍬を支いた百姓だの、小兒を負つた古女房だの、如何にも水見物をして居るらしい。

見ると、堪らなく嬉しくなつた。

「さあ、恚うしておいでなさい。」
と畦を踏分けて跡をつけては、先へ立つて、畠を切れて、夜は蟲が鳴く土手を上つたが、此處等は未だ襖を取るほどの雫ぢやなかつた。

線路へ出て、ブツと見ると、一面の濱田が何處となく、ゆさ／＼動いて、稻穂の分れ伏した處は幾ヶ所ともなしに細流が蜘蛛手に走る。二三枚空が映つて、田の白いは被つたらしい。松があつて雑樹が一叢、一里塚の跡かとも思はれるのは、妙に低くな

つて、沈んで島のやうに見えた、其處等も水が溢れて居よう。

「最う是だけかね、」

甚だ怪しからん次第だつたけれども、稻の上を筏でゞも漕いでくれたら、と思つて、傍に居た親仁に聞くと、

「汐が上つたら、まつと溢るいべい。」
と、腕組をして熟と視める。

成程、漁師町を繞つたり、別荘の松原を廻つたり、七八筋に分れて、又一ツ成つて海へ灌ぐが、其處へ行くと是でも巾が二十間ぐらゐ、山も賦になれば、船も歌へる、此の様子では汐が注さう。

と二人で見居るうち、夕日のなごりが、出崎の端から雲を射たが、親仁の額も赫となれば、線路も颯と赤く染まる。稻を潜つて隠れた水も、一面に佛立つて紫雲英が咲満ちたやうに明るむ、と心持、天の端を、ちら／＼白帆も行きさうだつた。

又是またこれに浮うかれ立たつて、線路せんろを田畝たんぼへ下おりたんだが、
やがて、稻いねの葉はが黒くろくなつて、田たが溝染どぶぞめに暮くれかゝ
ると、次第しだいに褪あせて行ゆく茜色あかねいろを、宛然さながら剥はぎたての牛うし
の皮かはを擴ひろげた上うへを、爪立つまたつて歩ある行くやうな厭いやな心持こころもち
がするやうに成なつ了しまつた。

丁ちやうど、田畝道たんぼみちを、八分目ぶんめほどで、一本橋ほんはしがある。
其それを危あぶなつかしく、一度渡どわたつて、二度目どめに又引返またひきかへして
からだつた 最もう一跨またぎで、漁師町れふしまちの裏うらへ
上あがらうとする處ところで、思おもひがけなく行ゆきついたらうで
はないか。」

「ふん、何どうしてだい。」
と醫師せんせいは枕まくらを抱だく。

小松原こまつはらは一息いきついて、
「何どうして？ ツて、見給みたまへ、平時いっもは、手拭てぬぐひを當あ
てゝも堰留せきとめられさうな、田たの切目きれめが、薬研形やげんなりに崩くづ
込れこんで、ニツニツぐる／＼と濁水だくすゐの渦うずを卷まく。此處こゝ
では稻いねが藻屑もくづになつて、どう／＼流ながれる。尤もつとも線路せんろ
から段々だん／＼下さりに低ひくいからね。山やまの裾すそで取圍とりかこんだ濱田はまた

ありたけの溢れ水は、瀬に成つて落ちて來るんだ。
但し大した巾ぢやない、一間には足りないだけれ
ども、深さは、と云ふ日になると、何と何うです、
崩れ口の畦の處に、漁師の子が三人ばかり、素裸で
浸つて居たらう。

「何うだ深いか。」

と一ツ當つて見ると、己達は裸で泳がい

聞くだけ野暮だ、と突懸り氣味に、

「深え。」

「二丈の上あるぜ。」

と口を尖がらかしたも道理こそ。此方づれの體は、
と見ると、私が尻端折で、下駄を持った。あの人も
又遣附けない褌を取つて、同じく駒下駄をぶら提げ
て、跣足で、びしょ／＼と立つた所は、煤拂の臺所
へ、手桶が打覆つた鹽梅だらう。」

此の時一所に笑ひ出したが。

「ね、小兒だつて、本場の苦勞人が裸で出張つて
る處へ、膝までも出さないんだ、馬鹿にするないで、
以て、一本參つたもんです。」

が、まだ威をどかしでは無ないか、と思おもふ未練みれんがあつた。
――處ところへ、ひよつこり久しばらく潜もくつて居ゐたのが、
鼻はなの前さきへ、ぶつくり浮ういた河童かっぱ小僧こぞう。

おやと思おもふと、ぶる／＼と顔かほをやつて、ふつと――
條すぢ仰あをむ向けに水みづを噴ふいた 深ふかいんです。

何どうも此これにや逡巡たじろいで、二人ふたりで顔かほを見合みあはせたんだ。
――

「其處さへ越せば、漁師町を一廻りして歸れるんで、丁ど可いくらゐな散步の積だつたんだが、其だもの、何うして、渡る處の騒ぎぢやない。

さあ、引返すとなると、線路から此處までの難儀さが思出される。難儀だつて程度問題、覺悟をしての草鞋掛でもあれば格別、何しる湯あがりのぶら／＼歩き。

それ、今言つた通り跣足です。成だけ水の上の高い處を、と拾つて畦を傳へば、雨續きで、がば／＼崩れる、路を踏めば泥濘で、迂る、乾いた處些ともなし。

「お危なうございますよ。」

「は、大丈夫、」

と聲を掛けて、漸と辿つたのだつた。また厄介なのは、縦横に幾ヶ處ともなく、畦の切目があつて、一寸薪を倒したほどの足掛が架つて居るが、唯さへ

落とす時分が、今日の出水で、ざあ／＼瀬になり、どつと溢れる、根を洗つて稻の下から湧立つ勢、飛べる事は飛べるから、先へ飛越えては、おもしろ半分、

『お手をお取り申しませうかね。』

と一畦離れて居て云ふと、

『是非、何うぞ。』

なんて笑ひながら、ま、何うにか通つたんだつけ。浅いと思つた水溜へ片足踏込んで、私が前へ下駄を脱いだんで、あの人も、其から跣足、湯上りの足は泥だらけで――あゝ、氣の毒だと思ふ内に、何處かの流れで、歩行してる内に綺麗に落ちる、其の位皆水です。

で三町ぐらゐ、又引返さなけりやならないんでね、其に段々暗くはなる、足許も悪からう、うんざりした、自分、まあ、何うなり、嘸困つた顔をして、と振り返る。

と此の時

薄り路へ被つた水を踏んで、其の濡色へ眞白に映つて、蹴出し褻の搦んだのが、私と並んで立つた姿—— そつくり何時見る、座敷の額の畫に覚えのあるやうな有様だつた—— はてな、夢か知らんと恍惚となつた。

「ざあ／＼、地の底を吹き荒れる風のやうな水の音。我に返つて、密と顔を見ると、何大して困つたらしくもなかつた。」

「此處は通れません。」

「引返せませう。」

「飛んだ御案内をしてお氣の毒です。」

「否、おもしろうござんすよ。こんな奇い態をして。」

「と美しく微笑みながら、」

「一層袂を擔ぎませうか。」

此の元氣だから。何うやら水嵩も大分増して、橋の中ほどを、蝦蟇が覗くやうに水が越すが、兩岸の杭に結へつけてあるだけが便りで、渡ると、ぐら／＼

ゝした、が、まあ、あの人も無事に越した。でも、私の帯へ背後から片手をかけて。

それから――前を見ると、此方が低い所爲か、ぐる／＼廻りに敵つて流れる、小川の両方に生被さつた、雑樹のざふ／＼揺れるのが、累累り、累累り、所々煽つて、高い所を泥水が走り懸つて、田も畑も山も一色の、最う四邊が朦朧として來た、稻なんぞは、手で觸るぐらゐの處しか、早や見えない。

人は一人も居らず、今渡つた橋は、魚の腹のやうに灰白く水の上へ出て居るが、其の先の小兒などは、何時の間にか影も消えて居た。

『小松原さん。』

とあの人が、摺寄つて、

『最う一つの路は何うでせうか知ら。』

と云つた、様子には出さんでも、以前の難澁は、同然に困つたらしい。

最う一つと云ふのは、小川が分れて松原の裏を行

く、其の川縁を蘆の根を傳ひ、廻りには成るが、
踏切の處へ出る 支流で、川は細いが、汐
は此の方が餘計に注すから、何うかとは思つたも
の、見す／＼厭な路を繰返すよりは、

「行つて見ませう。」

と歩行き出して、向を代へて、最う構はず、落水
の口を二三ヶ所、ざぶ／＼渡つて、一段踏んで上る
と、片側が蘆の茂りで。」

「透かした前途に、蘆の葉に搦んで、一條白い物がすつと懸つた。――穂か、否々、變に仇光りのする様子が水らしい、水だと無駄です。」

『此處に在らつしやい。』
と無駄足をさせまいため、立たせて置いて、暗くならん内早くと急ぐ、跳越え、跳越え、倒れかゝる蘆を雑立てゝ、近づくに従うて、一面の水だと知れて、落膽した。線路から眺めて水浸の田は、此處だらう。

が、蘆の丈でも計られる、然まで深くはない、其に汐が上げて居るんだから流れはせん。薄い水溜だ、と試みに遣つて見ると、ほんの踵まで、で、下は草です。結句、泥濘を迂るより樂だ。占めた、と引返しながら見ると、小高いからずつと見渡される、いや夥しい、畦が十文字に組違つた處は残らず瀬になつて水音を立てゝ居た。

早はやや暗くらくなつて、此この田たん畝ほに唯たゞ一人ひとりの筈はずの、あの
人ひとの影かげが見みえない。

濱はまで手鍋てなべの時ときなんかは、調子てうしに乗のつて、

「お戻ふささん。」

と呼よんだりしたが、最もう眞しんになつて、

「夫人おくさん！」

と慌あわてゝ呼よんだ。

「はーい。」

と云いふ、厭いやに寂さびしい。

聲こゑを便たよりに駈かけ戻もとつて、蘆あしがくれなのを勇いさんで誘さそひ、

「大丈夫だいぢやうぶ行いかれます。早はやくしませう、暗くらくなりま

すから。」

誰だれも落おちつては居ゐないのを、汝うぬが周章あわてゝ捲立まくした

てゝ、其それから、水みづにかゝると、あの人ひとが、又また波わたるの

か、とも言いはないで、踏ふ込こんでくれたんだ。

路みちも何どうやら廣ひろいから、尚なほ力ちからになる。押おし並ならんで

急いそいだがね。淺あさくて一面めんだから、見みた處ところは沼ぬまの眞中まんなか

へ立つた姿で、何だか幻の中を行く、天の川でも渡るやうで、爾時ふと又美しい色が、薄濁つた水に映つた――

小松原は齒を嚙んで言漉つたが、

『先方でも、手を出した

其を曳かうと

思つた時

私はぎよつとした。

つい目の前を、足に絡んだ水よりは色の濃い、重
つくるしい底力のあるのが、一筋、褐色の鱗を立て、
のたつて居るのが、向う岸の松原で、くつきりと際
立つて、橋の形が顯れたんだ。

此處に、一寸した橋があるんだが、其の勢だから
最う不可い。水の上で持上つて、だぶり／＼と煽を
打つと、蘆がまた根から穂を振つて、光來々々を極
めてるなんざ、情なからうではないか。

然も幅一間とは無いんだよ。

『不可ないのねえ。』

「駄目です、」

と言つた切。だつて。惜しからう。其の川一條の前途は、麗々と土が出て、薄りと霧が這つて、蟲の聲がするんだもの。最う近いから、土手ぢや車の音はするし、
少時睨み詰めて立つて居た。」

醫師はむく／＼と起きて、平胡坐で、枕を頤に突支つて、

「いや、散々、散々、お察し申すな。」

「處で、何時の間に來たか、ぱく／＼遣つてる其の橋向へ、犬が三疋と押寄せ、前脚を突立てたんだ。吠える、吠える！ うゝ、と唸る、びやう／＼齒向く。變に一面の水に響いて、心細くなるまで凄かつた。」

「彼方へ参りませう、人が見ると悪いわ。」

と低聲で、あの人が言ふ。

「何故。」

と思はず口へ出たが、はつと氣が付いて、直ぐびちや／＼と歩行き出した。

現在げんざい犬いぬに怪あやしまれて居ゐるんです

漁師れいし村むらを

表おもてに、此この松原まつばらを裏うらにして、別荘べつさうがあつて、時々ときどきピ

アノが聞きえたんで、聞ききに來きた事こともある。

奥座敷おくざしきとは餘あまり離はなれないから、犬いぬの聲こゑを變へんがつて、

人ひとでも出でて來くると成程なるほど悪い。

が、何なんだか今いまの一言ひとことが妙めうに胸底むなぞこへ響ひびいて、時ときめい
た、爲ために急きふに元氣げんきづいて、

『一奮發遣附ふんぱつやつくけませう。』

と勇いさみが出でた。」

「其の努力で、蘆の中だけは潜り抜けて、舊の方へ引返したが、最う、暗くなつて、足許は分らないで、踏むほどの場所がざぶ／＼する、ぢよろ／＼聞える、ざんざと云ふ。田だか畦だか覺束なく、目印ともならうと云ふ、雑木や、川柳の生えた處は、川筋だから轟と鳴る、心細さと云つたら。」

川筋さへ避けて通れば、用水に落込む事はなかつたのだが、然う恚うする内、唯其の飛々の黒い影も見えなくなつて、後は水田の暗夜になつた。

時に 急つた所爲か、私の方が眞先に二度に渡つた、ドンと手を突いてね、はつと起上る、と一のめりに見事に這つた。

『あれ、お危い。』

と云ふ人を、此方が、

『お氣を注げなさらないと、』

此の通り、ト仕方で見せて、だらしなく起つ拍子に、あの人もづるりと足を取られた音で、あとは黙然、そら解がしたと見える、ぐい、ぐい帯を上げてるが陰氣に聞えた。

氣が付いて、

『穿物を持って上げませう、』

と注意すると、

『はい、否、可うござんす。』

と云つたが、少時して、

『流れて了つたやうですよ。』

成程、畦の切口らしい、どつと落ちるんだ。

『飛んだ事をなさいました。』

『否、何うせ荷厄介なんですもの。さあ、参りませう。』

愚圖々して居たので、

『可いんですよ、構やしない。』

と其でも笑つた。此の方が私より未だ元氣が可い。

が、私が猶豫つたのは、駒下駄に、未練なものか。
自分のなんざ何時の昔失くなして居る。――實
は何方へ踏出して可いか、方角が分らんのです。尤
も線路の見當は大概に着いてたけれども、踏處が悪
いと水田へ陥る。

果して遣つた！ 意地にも立つた切ぢや居られな
くなつて、まゝよ、と膽を据ゑて、つか／＼と出よ
うとすると、見事に膝まで突込んだ。

『あつ、』と抜かうとして、畦へ腰を突いたつ
け、木曾殿落馬です。

お察し下さい、今でこそ話すが、こりや冥土へ來
たのかと思つた。あの廣場を手探りで何うするもん
かね。背後の足弱が段々呼吸づかひが荒

くなつてね、たうとう、

『些と休みませう。』

と言ひ出した。雪路以上、随分へと／＼に揉抜い
たから。

私は凭懸るものもなく、茫乎暗の中に立つたがね、

あの人は、と思ふと、目の下に、黒髪が倂立つ。

『腰を掛けたんですか。』

『えゝ、』

と云ふ。

『濡れて居ませう。』

『えゝ、何ですか、瀬戸物の缺がざく／＼して、』

私は肚胸を突いたんだ。

『不可い！ 貴女、そりや塵塚だ。』

と云ふ内にも、襪襪切や、瓜の皮、ボオル箱の壊れたのは未だしもで、いや何うも、言はうやうのな
い芥が目に浮ぶ。

『でも水の上よりは増ですわ。』

と断念めたやうに、何の不足もないらしく薩張と言はれたので、死なば諸ともだ、と私もどつかり腰を落した。むつくり持上つて、跡は冷たい。犬の死骸ぢやなからうかと、摺抜けようとしたけれども、頬擦るばかりの鬢の薫に。

此處で、眞に相濟まない、餘計な處へ誘つたばかりで、何とも飛んだ目にお逢はせ申す、嘸身體に觸りませう、汚させ、濡れさせ、跣足にさせ、夜露に打たせて
羅綾にも堪へない身體を、と言はうとして、言ひやうがないから、

「荒い風にもお當りなさらない。」

とへマを言つて、あゝ厭味だと思つて、冷汗を搔いた處を、

「お人が悪いよ、子持だと思つて、」

是に又ヒヤリとしたやうに覚えて居る。」

「其と同時に小児の事が氣になつて
 ひ出すと、女中と最う寝たらう。で、大して心配も
 しない様子、成程寝る時刻、九時些と過ぎたかも知
 れない。汽車が二三度上下した。」

此の汽車だが 果しの知らない暗闇の廣
 野 ー ー 逆も爾時の心持が、隅々まで人間の手の
 行届いた田畝とは思はれない、野原か、底知れぬ穴
 の中途 ー ー 其の頼りなさも、汽車の通るのが、
 人里に近くつて嬉しかった。其が ー ー 後には可
 悪い偉大な獣が、焰を吹いて唸つて来るか、と身震
 をするまでに、成つて了つた。

第一足の出しやうがない。それに
 最う恚う夜も遅くなつては、何事もなく無事に家
 に歸るとして、唯二人で今までなんだから、女中は
 じめ變に思はう。特に出征中の軍人の夫人だ。然う
 でもない、世間ぢや餘計な風説をして居る折からだ
 から憂慮はしい。

「何うでせう。」

と甚だ言兼ねた事ではあつたが、既に――人が見ては悪いわ――と言つてくれた人だから、恚う聞いた。が、其の實、否、人は何とも思ふまい、と此の人だけに、心配をせず居ようと期したんだ。すると些と案外で、

「さあ、私も其が氣になります。」

返事が此で。何とも言ひやうがなくつて溜息が出た。あの人もほつと言ふ。話だけは色めかしい中に、何ともお話にならん事は、腹が、ぐうと鳴る、あゝ、情ない何事だらう、と氣にするほど、ぐう／＼言ふ。

あの人も聞えたか。

「お腹が空いたでせうね。」

と來たのにや、赫としたよ。但し然う云ふ方も晩飯前です。

詮方がない、大聲を揚げて見ようかとも言ひ出したが、こりや直ぐに差留められた。勿論、お怒鳴んなさいと命令をされたつて、此奴ばかりは、死んで

もあやまる。早い話が、何と云つて救を呼びます、
助船でもないだらう、人殺し
串戯ぢやない。
い。」

醫師は聞く中にも笑出した。

言ふものも釣込まれたが、

「今こそ苦笑ひも出るけれど、

實際だ、

腹のぐう／＼鳴つた時は、我ながら人間が求める糧
は、何爲恚う淺間しい物だらうと熟々思つた。

處で

ぢや、何を便りに塵塚に腰を抜いて居たか、と言
ふに、此處も娑婆だから、其の内には、月が出よう
と空頼み、あの人も恐らく然うでもあつたらう、
尤も何かの拍子に、

『戦争に行つて居る方の事を思へば、恚うやつて
一晩ぐらゐ、』

とは言つたがね。まさか夜の明けるまで然うして
居られるものとは思ふまい。

糠雨ぬかあめが降ふつて來たもの。其その天窓あたまから顔かほへかゝるのが、塵塚ちりづかから何か出でて、冷つめたい舌したの先さきで嘗なめるやうです。

水みづの音おとは次第しだい々々いゝゝに、或あるひは嘲あざけり、或あるひは罵ののし、中なかにや獨言ひとりごとを云いふのも交まじつて、人ひとを憤いきどほり世よを呪のろつた聲こゑで、見みろ、見みろ、汝等なんぢら、水源みなもとの祕密ひみつを解かいせず、灌くわん漑がいの恩おんを謝しやせず、名なを知らず、水みづらしい水みづとも思おもはぬ此この細流せいらぎの威力いりよくを見みよと、流ながれ廻まはり、駈かけ繞めぐつて、黒白あやめも分わからぬ眞しんの闇夜やみよを縦たてに蹂躪ふみにじる。と時々とき／＼どどどと勝誇かちほこつて、躍上をどりあがる氣勢けはひがする。

其その流ながれるに從したがうて、我わが血ちを絞しぼり出だされるやうで、堪たへ難がたい。

次第しだいに雨あめが溜たまるのか、水みづが殖ふえたか、投出なげだしてる足許あしもとへ、縮ちぢめて見みても流ながが出来できて、ちよろ／＼と搦からみつくつと、袖そでが板いたのやうに重おもくなつて、塵塚ちりづかに、ばしや／＼と沫しぶきが掛かる、雫しじが落おちる。

地鳴ぢなりが轟くわつとして、ばつと一條すぢの焰ほのほを吐はくと、峰みねの松まつが、颯さつと其その中なかに映うつつて、三丈ちやうばかりの眞黒まっくろな面つら

が出た、眞正面へ、はた、と留まつたやうに見えて、
ふつと尾が消える。

下りの終汽車らしい、と思つた時、

『あ痛、痛。』

はつと擦寄ると、あの人がぶる／＼震へて、

『胸が。』

と云ふ、齒の根が合はない。

『冷えたんです。』

と言ひながら、私もわな／＼し出した。
」

「一生懸命の聲をして、

「さ、お掴んなさい。」

とずっと出すと、ぴつたり額を伏せて、緊乎と膝を掴んだが、苦痛を堪へる恐い力が入つて、痺れるばかり。

「確り

確りして下さいよ。」

背中を擦らうとした手が、這つて、ひや／＼と後毛を潜つて、柔かな襟脚に障つたが、やがて水晶のやうに冷たいのを感じた。

爾時ふつと又、棲の水に映るのが、薄彩色して目に見えたが、其ならば、夢にならう、夢ならば、此處で覺める！ 膝に倒れたのは、あの人だ。

私は猛然として、思はず抱きながら、引立てながら起上つた。

「我慢なさい。こんな事をして居ちや、生命にも

障りませう。血の池でも針の山でも構はず駈出して
行つて支度して迎に來ます。」

と聲も震へながら云ふと、

「一人で、何うして居られませう、一所に。」

ツて、ぐいと袂に掴まつたが、絞ると見えて水が
垂つた。

「田も畦も構はない、一文字に駈け抜けるんです、
怪我があると不可ません。」

「可いの、貴下、婦は最期まで、殿方が頼りです、
さ、連れて行つて！」

と縋つた手を、緊乎と取合つた。

「ぢや、惡魔に攫はれたと、斷念めて、目を瞑つ
て、覚悟をして」

「は、瞑りました。」

と言はれたのにや、ほろりと熱い涙が出た。」

と、小松原は拳を握つた手首をかへして、目を壓
へて、火入とも言はず、片手を煙草盆にはたと落し
た。

「考へて見れば怪しい。」

はじめから其の覚悟をすれば、何も冷え通るまで
畦に踞んでるにも當らず。不斷見れば掌ほどの、あ
の踏切田畝を、何に血迷つてたんだか、正氣では分
りません。平時の幻と言ひ、をかしたものに弄ばれ
てゞも居たかと思ふ 尤も其の堪へられな
い水の中でも、時々變に恍惚となると、何故か雲に
でも乗せられたやうな氣がする、其時は、あの人と
然うして居るのが嬉しかった。

畢竟ずるに、言譯澤山の戀かも知れん。
其の罰です。

後は御存じの通り、空を飛ぶやうな心持で、足も
地につかず、夢中で手を曳合つて駈出した處を、阿
と云ふ間もなく、終汽車で勿飛ばされた。

氣が付いた時は、眞蒼な何かの灯で、がつくりと
なつて、人に抱へられてる、あの人の姿を一目見た
んだがね、衣を脱がしてあつた。唯一束ねの滑かな
雪で、前髪と思ふのが、亂れかゝつて、唯其の鼻筋
の通つた横顔を見ただばかり 乳の邊に血が

染にじんだ、――此この方ほうとても、御ご多た分ぶんには漏もれぬ、
應おつぎ擧よが描えがいた七な難なんの圖づにある通とほり。まだ口くちも利きけな
い處ところを、別べつ々くに運はこばれた、それが見み納なめ。

君きみも知しつてる、生いのち命めいは、あの人ひとも助たすかつたんだが、
其その後のち影かげを隠かくして了しまつて、未いまだに杳えうとして消せう息そくがな
い。

是これが風うはさ説せの心しん中ちゆう仕し損そん。言い譯ひわけをして、世せ間けんが信しんずる
くらゐなら、黙だまつて居ゐても自おのづ然じから明あかりは立たつ。面めん
と向むかつて汝なんぢが、と云いふものがないのは、君きみが何なんにも
言いはないと同おんなじなんだ。

お戻ふきさんも、大おほ方かた同おなじ考かんがへだつたものだらう。が、
これは夫をに顔かほの合あははされないのは、道だうり理りです。

何なにも私わたしばかりが澄すまして活いきて居ゐるのがやな
い、今いま此こ處ところに、君きみと恚いかうやつて居ゐる時ときを、行ゆく方へ知しれ
ず、と思おもつて居ゐるものもあらう。あの人ひとも又また、同おなじ
やうに、何ど處ところかで心こころ合あひの友ともに、述じゆつ懐くわいして居ゐようも
知しれない。――唯たゞもう一ひと度ど逢あひたいよ。「
と團うち扇はを膝ひざにつくと、額ひたひを暗くらうした。

醫師せんせいは黙だまつて居ゐる。

「しかし、」

と、小松原こまつばらが額ひたひをあ上げた。

「未練だね。世間ぢや、誰もあの人が生きて居るとは思はない。——私だつて、實際生存へて居ようとは考へないが、随分其當時、表向きに騒いで、搜索もしたもんだけれども、其らしい死骸も見附かないで、今まで過去つたんだ。だから、もしやが頼まれる

其かつて、今此處に、君の内、に其の人が居るか逢へ、と云はれたつて逢はれるわけでもないんだが。」

「しかし逢ひたいんだ？」
と醫師は笑ひながら口を入れた。

「
」

「成程、其處で魔されたんだ。其の令夫人に魔されたのは、却つて望む處かも知れんが、あとの泥水は厭だつたらう、全く氣の精だな。遁出したも道理

だ。よく、あの板廊下が鐵道の線路に化けなかつた。」

「時に、」

小松原は、氣が着いたらしく更まつて、

「あの、白骨だがね、」

と皆まで言はず、手を掉つて、

「大丈夫、其の令夫人の骨ぢやない。」

「骨ぢやない、」

と鸚鵡返しで、

「けれども、婦のだと言ふぢやないか。何年経つ

たんだか、幾十年過ぎたんだか、知れないが、婦に

は變りはなからう。骨になつても小町は小町だ。」

婦が、あの姿を人目に曝されたら、どんな心持だ

と思ひます。――君にこんな事を云ふのは、解剖

室で命乞をするやうなものだが、例ひ骨でも、一室

に泊り合はせたのは、免れない縁だと思ふ。見えん

處へ隠してくれんか。――私は最う、あの人

田畝で濡れた時の事を思つても、悚然とする。何う

だね、可哀想だとは思はないかね。」

「然うさな。まさか私だつて、縁日の賣藥見たいに、あれを看板に懸けちや置かん、骨を拾つた氣なんだから、何も品物を惜みはせんが、打棄つて置き給へ。そんな事を氣にするのは宜くないから止したが可からう。」

「貴郎、」

と優しい聲がしたので、小松原は身を縮めて、次の室の暗い中を透かした。暑いので襖は無いが、蚊帳が重ねて釣つてある。其の中に、浴衣の模様が、蝶々のやうに掠れて見えたは細君で、然も坐つて、紅麻に裳を寄せ、端近う坐つて居た。

「何だ、起きて居たのか。」

「はい、つい、あのお話しに聞惚れまして、」
と云ふのに、しんみりと涙が籠る。

「何うも、」

とばかりで、小松原は額を壓へた。醫師は事も無げに、

「聞いたのは構はんよ、澤山泣いて上げる。だが、

其處らへ溢しちや不可んぜ、水が出ると大變だ。」

「あれ、可厭な。」

「馬鹿だな、臆病。」

「だつて、」

と蚊帳の裾を引被ぐ、腕が白く、扱帯の紅が透いた時、わつと小兒が泣いたので、

「おほ。」

と云つて添臥したが、二人も黙る内、すや／＼と又一寢入へねいつた。

「ねえ、貴郎、然うして、小松原さんのおつしやる通りになさいよ。何だか可恐いんですもの。」

「此の人が魔されたつて、お前が恐しがる事はないぢやないか。」

と弄かふ如く、團扇を膝でくるりと遣る。

「否、ですがね、あの御骨」

「一寸待て、御骨は氣になる。はゝはゝ。」

「御免なさいませよ。」

と客に云つて、細君は、小兒に添乳の胸白く、搔

巻長まきながう、半なかば起おきて、

「串戯じやうたんではなくつてよ。貴郎あなたが持もつて來きて、彼處あそこへ据すゑてから、玄關げんくわんの方かたなんぞも、此この間中あひだちういろん種々いろいろな事ことを言いつてるんですよ。

話聲はなしこゑがするの、聲音あしおとが聞きえるのつて——大方おほかた女中ぢよちゆうなんかを徒いたづに威おどすんだらうと思おもつて、氣きにもしないで居あましたけれども、今いまのお話はなしの様やう子すだと、何なんだか、何どうとも言いへませんわ。」

「ねえ、小松原さん、」

とぼかしたやいな顔が、蚊帳の中で臍に動いて、
「あの御骨だつて、水に縁があるんですもの。」

「婦女子の言です。」

と醫師は横を向く。小松原は、片手を敷布の上、
隣室へ摺寄る身構へで、

「水に縁と 仰有ると？」

「あれは貴下、何ですわ、つい近い頃、夫が拾つ
て来て、彼處へ飾つたんですがね。其の何ですよ、
舊あつた處は沼なんですつて。」

「沼！」

「おつと一直《す》ぐに、然う目の色を變へるか
ら困る。鯰に網を打ちはしまいし、誰が沼の中から、
鞆上げるもんか。」

「だつて、そりや沼からぢやありませんまいけれど、梅雨あけに水が殖えたので、底から流出したんだらうツて、貴郎が然う言つて在らしたではありませんか。——小松原さん、此の梅雨あけにも田畝へ水が出ましてね、先刻おつしやいました、踏切の前の橋も落ちたんですよ。蒼沼が溢れたんですつて、田畝の用水は、皆其處から來るんだつて申しますですわ。」

其の近處の病家へ行きました時に、其家の作男が、沼を通りがゝりに見て來たつて、話したもんですから、夫が貴下、好事に其の男を連れて歸りがけに、廻道をして、内の車夫に手傳はして、拾つて來たんですわ。」

御骨は、沼の縁に柔な泥の中にありましたつて、何處も不足しないで、手足も頭も繋つて、膝を屈めるやうにして居たんださうです。」

「妄誕臆説！」

と稱へて、肩を一團扇で敲く。

「臆説つて、貴方がお話しなすつた癖に。而して
恚う骨に成つてから、全體具つて居るのは、何でも
非常な別嬪に違ひない。何骨とか言つて、佛家では
菩薩の化身とさへしてある。第一膝を折

つた身躰の可い處を見るツて、散々効能を言つたで
はありませんか。」

と、最う小兒も寐たので、搔卷からするりと出
て、襖を合はせる。

醫師喟然として、

「宜しく頼む。あとは君にまかせるから、二人し
て、あの骨を其の人だとも何とでも御意なさい、
此方へ來て講中にならんか。」

と笑ひながら、無手と蚊帳を出て、廊下へ寢衣で
突立つた。

が横向に隣を見て、

「何だ、お前も手水か。馬鹿な、今の話しで不氣
味だからつて。お客様の居る處を、連立つて便所へ
行く奴があるかい。」

と言ふ。

小松原が、ト透すと、二重遮つて仄ではあるが、
細君は蚊帳の中を動かずに居たのである。

「貴郎、」

と此の時、細君の聲は、果せる哉、太く震へて、

「貴郎」

「應、」

小松原も蚊帳の中に悚然として、

「酒田。」

と變な聲をする。

「誰か居ますか。」

と笑ひながら、無手と蚊帳を出て、廊下へ寢衣で
突立つた。

「おほ」

と醫師は、蹠跟けたやうに、

「私は此處に居ますんですよ。」

雨戸を背に、此方を向き替へ、斜めに隣室の蚊帳
を覗いた。

「誰だ、今のは？」

うつかり醫師が言ふや否や

「厭いや

と立つて、ふら／＼と、淺黄あさぎに白地しろぢで蚊帳かやを潛くると、裾すそと裾すそとにばつと挟はさまる、と蜘蛛くもの巣すに掛かつたやうに見みえたが、一燭あふつて、すつと瘦やせたやうになつて、此方こちらの蚊帳かや　　廊下らうかに事ことはあるものを、夫そを力ちからに其處そこへは出でられぬ　　腰こしを細ほそく、乗のるばかり、胸むねに縫すがつた手てが白しろく、小松原こまつばらの膝ひざにしがみついた。

「　　此この状さまを　　後のちに、醫學いがく一士しが人ひとに語かたる。　　」

「蒼沼あをぬまの水みづは可恐おそろしい、人ひとをして不倫ふりんの戀こひをなさしむるか、私わたしは嫉ねたまうとした。」

爾時そのとき醫師せんせいは肩かたを昂あげて、

「雨あめかな。」

と仰あをむ向けになつたが、又また、俯うつむ向むいて胸むねを拂はらつた。

「何なんだ、廊下らうかは水みづだらけだ。」

細君さいくんは何なんにも言いはぬ。小松原こまつばらも居ゐ寤ずまつて、忙せはしく息いきをするばかり。

鶏とりが鳴ないたので、徐やっと細君さいくんが顔かほを上げたが、廊下らうかに突つ立つた夫をとこを見みた時とき、聞耳きみみを立てゝ、

「何なんです 　　がた／＼、がた／＼言いつて、」

小松原こまつばらが、

「あ、」

「彼あれか、」

と醫師せんせいも其處そこで聞取きくとつた。

「酒田さかた 　　先刻さつきのも、」

「むゝ、診察處しんさつじよだ。」

「あれえ。」

「開あけて見みると何なんにも居ゐないのだ。が、待まてよ。」

と言つて、蚊帳の周囲をぐるりと半分、床の間を
がたりと遣ると、何か提げた、其の一腰、片手に洋
燈を翳したので、黒塗の鞘が、袖をせめて、つらりと
と光つた。

「危い、貴郎、」

「大丈夫だ。」

「否、」

細君は一聲、誰かを呼んで、

「玄關の方を起して下さい、正吉　――」

最う醫師の姿はなかつた。

ばたん、と扉の開いた音。

二人が揃つて、蚊帳の中を廊下際で、並んで雨宿
りをする姿で立つた處へ、今度は靜に悠々と取つて
返す。

「何うした。」

「驚だ。」

「え。」

「驚が三個よ。」

「何處に、ですえ。」

と細君は齒の音も合はぬ。

醫師は眞面目な顔して、

「場所は些と悪い、白いものゝ前だ。」

「あれ。」

「嗚また蒼沼から、迎に來たと言ふだらうなあ。」

と兩戸を一枚、颯と風が入つて、押伏せて、其處に置いた洋燈が消えた。

が、鶏が又鳴いて、臺所で誰か起きた。

白骨が舊の沼へと立返ることになつて、此の使者は、言ふまでもなく小松原が望むで出た。一夜の縁のみならず、其處は、自分とあの人とが爲に浮名を流した、濱田の水の源ぞと聞くからに、顔を知らぬ許嫁に初めて逢ひに行く氣もすれば、神仙の園へ招待されたやうでもあつて、いざ、立出づる門口から、早や天の一方に、蒼沼の名にし負ふ、緑の池の水の色、峰續きの松の梢に、髣髴として瑠璃を湛へる。

其の心は色に出て、醫師は小松原一人は遣らなかつた。道しるべかた／＼、介添に附いたのは、正吉と云ふ壯い車夫。

國手お抱への車夫とあると、一寸聞きには侠勇らしいが、いや、山育ちの自然生、大の浄土宗。お萩が好の酒嫌ひで、地震の歌の、六ツ八ツならば大風から、七ツ金ぞと五水りやうあれ、を心得て口癖にする。豪いのは、旅の修行者の直傳とあつて、
『姑蘇啄麻耶啄』と呪して疣黒子を抜くと言ふ、使ひがら以つて來いの人物。

是が、例の戸棚掛の白布を、直ぐに使つて一包み、昨夜の一刀を上に乗せて、も一つ白布で本包みにしたのを、薄々沙汰は知つて居ながら、信心堅固で、怯氣ともしないで、一件を小脇に抱へる。

此の腰の物は、魔除けに、と云ふ細君の心添で。細君は、白骨も戻すと極り、夜が明けると、ぱつと朝露に開いた風情に元氣になつて、洗面の世話をしながら、縁側で、向うの峰を見て顔を洗ふ小松原

に、

「さくばん 昨晩はたのしお楽しみ

な何故つて。まあ、にく憎ら

しい。奥おくさんが逢あひに來いらつしやつたではありませ
んか。「やなど遣やつたものだが、あへ敢て是これは冷評ひやかした
のではない。其その證據しよこには、小松原こまつばらと一足違ひとあしちがに内うちを出で
て、女子扇をんなあふぎと御經料おきやうれうを帶おびに挟はさんで、じり／＼と蝉せみの
鳴なく路みちを、其寺なにかしじへ。供養くやうのため　――

「沼さ行く道は此を入るだよ。」
 と正吉が言ふ處を、立直つて見れば、村の故道を横へ切れる細い路。次第高の棚田に架つて、峰からなぞへに此方へ低い。田の青さと、茂つた樹立の間を透いて、六月の空は藍よりも蒼く、日は海の方へ廻つて、背後から赫と當るが、此處からは早や冷い水へ入るやう。

三方、山の尾が迫つた、一方は大なる楓の梢へ、青田の波が越すばかり。それから青芒の線を延して、左へ離れた一方に、一叢立の藪があつて、夏中日も當てまい陰暗く、涼しさは緑の風を雲の峰の如く、さと揺出し、揺出す。其の上には、萱で包んだ山が見えたが、遠いと覺しく、峰の松が、鹿のイんだ姿に小さい。藪に續いた一方は雑木林で、颯と黒髪を捌いた如く、梢が亂れ、根が茂る。

路は其の雑木の中に出つ入りつ、絲を引いて枝折にした形に入る
 赤土の隙間なく、凹に蔭

ある、樹の下闇の鱗爪の跡、馬は節々通ふらしいが、
處がら、龍の鱗を踏むとも思へば、鼈の足痕を辿る
よとも疑はれた。

次第に山の裾を分け上ると、降の楓を左の方に低
く視めて、右へ折曲つて最う一谷戸、雑木の中を奥
へ入らうとする處の、山懐の土が崩れて、目の下の
田までは落ちず、徑の端に、抜けた岩ごと泥が堆か
つた。

「沼泥は此の先でがんす。」

と正吉は前へ立つた。山崩れで、爰に

路の切れたのも、何となく、浮世を隔てた、意味あ
りげにぞ頷かるゝ。

「梅雨あけに、醫師と、此の骨さ拾ひに來つけ。」

其頃の雨に緩んだゞね。腕車もはい、持立てるやう
にして此處までは曳いて來たゞが、前あ挺でも動き
ましねえでね。」

と言ふ。

此邊このあたり

何處どこかで何の鳥とりか一つ鳴出なきたした。

何、正體しやうたいを見れば、閑古鳥かんこどりにしる、直其處等ぢきそこいらの樹きの枝えだか葉隠はかくれに、翼つばさを搔込かいかんだのが、けろりとした目で、閑ひまに任まかして、退屈たいくつまぎれに獨言ひとりごとを言いつて居あるのであらうけれども、心こころあつて聞きく者が、其その境さかひに臨のぞむと、山やまから谷たに、穴あなの中の蟻ありまでが耳みみを澄すます、微妙びまうな天樂てんがくである如ごとく、唳りやう々として調しらべ奏かなでる。

きよ、きよら、くらゝ、くらゝつ！

と轉ころがして、發奮はつふんみ掛かつて、一寸留ちよつととめて、一つ撓ためて置おいて、ゆらりと振ふつて放はなす時とき、得えも言いはれず銀鈴ぎんれいが笏「たまたまに響ひびく。

小松原こまつばらは、魂たましひを取とつて扱しごかれるほど、犇ひし々と身みに堪こたへ、

「京きやうから、今日けふら 來くるか、

來くるか！」

と言いはれるやうで、

「來きました、東京とうきやうから今日けふ來きましたよ。」
と胸むねの裡うちで言いつた。

其の蒼沼は

小高い丘に、谷から築き上げた位置になつて、對岸へ山の青簾、青葉若葉の緑の中に、此の細路を通した處に、冷い風が面を打つて、爪先寒う湛へたのである。

水の面は秋の空、汀に蘆の根が透く邊りは、薄濁りに濁つて、二葉三葉折れながら葉ばかりの菖蒲の伸びた蔭は、どんよりと白い。木の葉も、ばら／＼と散り浮いて、ぬら／＼と蓴菜の蔓が、水筋を這ひ廻る。――空は、と見ると、覆かゝるほどの樹立はないが、峰が、三方から寄合つて、遠方は遠方なりに遮つて、池の周圍と同じ程より、多くは天を餘さぬから、押包むだ山の緑に藍を累ねて、日なく月なく星もなく、倒に沼の中心に影が澄んで、其處にこそ、蒼沼の名に聞ゆる威厳をこそ備へたれ。何となく涸れ荒びて、主やあらむ、其の、主の留守の物寂しい。

濃い緑の雑樹の中へも、枝なりにひら／＼と日の光が折込んで、縁を淺黄に、木の葉を照らす。此の影に、人は蒼白く一息した。

何故か、葬禮の式に列つたやうで、二人とも多く口數も利かなかつたが、やがて煙草も喫まないで、小松原は踞つた正吉を顧みて、

「何處で拾つたね。」

「やあ、其だがね 先刻から氣い付ける

だが、何うも勝手が違つたぞよ。確、其處だつけど勘考します、其れ、其の隅つこの、こんもり高な處さ、見さつせいまし、己あ押魂消たゞ。其の節あんな芭蕉はなかつけ。」

と言ふ。

目覚しいのは、其處に生えた、森を欺くやうな水芭蕉で、沼の片隅から眞蒼な柱を立て、峰を割り空を裂いて、ばさ／＼と影を落す。ものゝ十丈もあらうと見えて、恰も此の蒼沼に颯と萌黄の窓帷を掛

けて、倒に裾を開いたやうな、沼の名は、或は是あ
るがためかとも思はれた。

正吉が知らずと云ふ、梅雨あけの頃は、未だ丈伸
びぬ時節であるから、今日見付けたのを、訝しむ仔
細は無い。

却説、家を出る時から、拾つた場所へ舊の通り差
置かうと言ふではなく、兎もあれ、沼の底へ葬り返
さうとしたのであるが、いざ、となると汀が浅い、
唯白骨は肋の数も隠されず、蝶々蜻蛉の影はよし、
鳥の糞にも汚されよう。勢ひ諸手高く差翳して、曳！
と中心へ投込まねばならぬとなつた。

「そんな事が出来るものか。」
と小松原が猶豫ふと、
「成程、へい、手荒だね。」
と正吉さへ頷くのである。

此處で、小松原が心着いたのは、其の芭蕉で

「まあ、其を解け。」

と手傳つて、上包の結目を解くと、づしりと壓にある刀を取つたが、其のまゝ、するりと抜きかける。

「虹の如く、葉を漏る日の光に輝くや否や、

「わッ！」

と正吉が飛退つた。途端に白布の包は、草に乗つて一つ動く。

「旦那、氣イ確に持たつせえ。」

昨夜からの小松原の容子は、眞個人目には變だつた。是は氣が違つた、と慌てたらしい。

やがて孫呉空が雲の上を曳々聲で引背負つたほどな芭蕉を一枚、づる／＼と切出すと、芬と眞蒼な香が樹の中に籠つて、草の上を引いて來たが――
全身引くるまつて乗つかつた程に大いのである。

小松原は莞爾々々しながら、「さあ、これへ乗せよう。」

まざ／＼と見るには堪へぬから、其の布で包ん

だまゝ、但結目を解いたゞけで、密と取つて、骨を
廣葉の只中へ。葉先を汀へ、蘆摺れに水へ離せば、
ざわ／＼と音がして、つるりと、迂る、柄を向うへ

「南無阿彌陀南無阿彌陀。」

と殊勝に正吉が、せめ念佛で疊掛けるに連れて、
裂目が鱧のやうに水を捌いて行く、と小波が立つて、
後を送つて、やがて沼の中ばに、静と留まる。

其まゝ葉が垂れると、縋りつく状に、きら／＼と
水が乗る、と解けるともなしに柔かに、ほろ／＼と
布が弛んで、細長い包みの裾が、ふツくりと胸にな
り、婦が臥した姿になる。

思出して、はつと目を塞いだが、頓て見れば、最
う沈んだ。

途端に、ざら／＼と樹が鳴つて、風が走る。そよ
風が小波立てゝ、沼の上を千條百條網の目を紋つて
掛寄せ掛寄せ、沈んだ跡へ揺かけると、水鳥が衝と

蹴^けた如^{ごと}く、芭蕉^{ばせを}の廣葉^{ひろは}は向^{むか}うの汀^{みぎは}へ、する／＼と小^{ちひ}さく片寄^{かたよ}る。

きよ、きよら、きよきよら、くらゝつ！

と、しばらくは唯鳥の聲。

熟と沼の面を見て居ると、何處かに、其の人の顔がある。が、水の皺が揺つては消し揺つては消す。――然うかと思ふと、其の水紋の揺めく綾が、ちら／＼と目になつて、瞳が流るゝやうでもある。ソレ鼻、ソレ口、と思ふ處が、ふら／＼と浮いて來ては、仰向けに沈んで消える。もう些とで、もう些とで、と乗出すけれども、もう些とで絡らない。

急つて、二いて、立つたり居たり、汀も其方此方、場所を變へてうろついて見込んだが、不圖心づいて二せば、早や何が染るでもなく、緑は緑、青は青で、樹の間は薄暮合。

「旦那最う晩方だよ。」

と云つて、正吉が歸途を促がしたのは餘程の前で、
其を、無理遣りに一人歸してからさへ、早や久しい。

獨になつて、思ふ随、胸にたゝんだ空想に耽らう
と、待構へたのは是からと、先づ、ゆつくり腰を卸
して、衣紋まで直して、其から横になつて見たり、
起返つて見たり。

兎角して沼の中を、身動きもしないで覗込んだ

あはれ水よ、偉なる宇宙を三分して、其の一を有
する汝、瀬となり、瀧となり、淵となり、目のあた
り我が怪しき戀となりぬ。

いで、霧となつて虹を放ち、露と凝つて珠ともな
る。爰に白骨を包んでは、其の雪の如き膚とならず
や、あの濡れたやうな瞳とならずや。

と思ひ思ふ、正しく、其處に、水底へ、意中の夫
人が、黒髪長くかゝつて見ゆる。

見ようとすると、水が動く。否、否、我が心の動
くために、人の姿が散るのであらう。

胸を打つて、胸を掴んで、咽喉をせめて、思ひを

一處に凝らさうとすれば、猶ぞ、千々に亂れる、砕くる。一層諸共に水底へ。

が、確に其の人が居ようか怪しい。否、

正しく、其處に、乃し葬つた骨がある。骨は確に

確に骨は、夫人が此處に身を投じて、朽ち

ず、消えず、砕けぬ。――白き珊瑚の玉なす枝を、

我がために残したことは、人にこそ言はね、昨夜よ

り我は信じて疑はぬ。

何が不足で一所に死ねぬ。――

「其の肉身か。」

と己が頭髮を掴んで、宙に下がるばかり突立つた。

「卑怯だ、此奴！ 始から其は求めぬ誓であつた。

又其を求むる位なら、何故、行方も知れず捉ふる影

なき其の人を、恚くまで慕ふ。忘れられぬは其の靈

であらう。其の靈は、其處にある、現在

骨まである。何が、何が不足で飛込めない。

肉身か、或は其もある。沼の水は、即ち骨を包む

膚、溺れて水を吸ふは、尚ほ其の人の唇に觸れるに

違はん！

入れ、入れ、入れ、さあ／＼／＼／＼、と水が引き引き、ざわざわと蘆を誘つて、沼の真中へ引寄せ
る。

小松原は立つたまゝ地蹈を踏んだが、

「えゝ！ 腑効ない。」

どつかり草へ。

蘆の葉末に水を載せて、晝の月の浮いて映るが如く、沼の其處に、腕か、肩か、胸か、乳か、白々と
漾ひ居る。

ソレ／＼手に取るばかり、其の人が、と思ひながら、投出して見ても足が未だ水へは達かぬ。

何をか疑ひ、何をか猶豫ふ。

餘の事に、此處へ來るは今日には限らないと思切つて、はじめて悚然として、歸らうとして、骨を送つた船の漾ふ處を視むれば、四五本打つた、杭の根に留つたが、其の杭から、友染の切を流した風情で、黄昏を翡翠が一羽。

其を恠う視めた時、平時とろ／＼と、眠りかけの、あの草の上、樹の下に、美しい色の水を見る、描いたる如き夢幻の境、前世か、後世か、或處の一面の繪の景色が、彩色した影の如くに浮んだので、あゝ、此のまゝ此處へ寐るかも知れない。

其も可、まゝよ、成るやうに成れと成つた。

其の内に、翡翠の背らしいのが、向ふで、ぼつと大きくなり、従つて輪郭は臃になつたが、大きくなつたのは近づくので、臃になるのは、山から沼の上を暮増るのである。其の暮れるのと、來懸るのが、蘆の汀を段々傳ひに、そよ／＼と風に、背後を、吹かれ、送られ、近づいて、何の聲音も聞えなかつたが、上からか下からか、小松原の目に、婦の色ある衣の裾が見えて、傍に來て、しつとり留る。

「奥さん。」

と、我知らず叫んだが、はつと氣が附いても枕は
して居ず、此の時は、診察室の寢臺でなかつた。其
處で、

「誰かど何か言ふ。唯赫として、初手のは分らな
つた。瞳を凝らして、其のすつと通つた鼻筋と、睫
毛が黒く下向に其處にイんだのを見出した時、

「立二さん。」
と胸を抱いた手が白く、能くは分らぬけれども、
着たものゝ柄にも因るか、久らくの間に、稍太肉だ
つた人が、げつそりと痩せて小さくなつた。

「おほ！」
とばかりで、肩で呼吸して、草に胡坐したまゝ、
己が膝を引摺むで、せい／＼言つて唇を震はす。

上では、俯向きさまに、髪が揺れたが、唇の色が
燃え、得も言はれぬ微笑みして、
「變つた處で
餘りだから、お化だと思
ふでせう。」

と相變らずしとやかなものゝ言ひやう哉。

其れどころか、お化ばけ なら、お化ばけで、又また
其の人ひとなら其の人ひとで、言いひたいことが一切いっさい經きやう、あり
つ丈たけの本箱ほんばこを引ひくり返かへしたのと、知しつた丈だけの言ことばを大おほま
絡とめにしたのが、一齊いちじきに胸むねへ込こみ上げて、咽喉のどで支つかへて、
ぎうとも言いへず、口くちは開あかずに、目めは動うごく。

「それでも、」
と鬢びんへ一寸ちよつと手を遣やつたが、櫛くし、笄かうがひ、簪かんざし、リボン、
一ひとツもそんなものは目めに入はいらなかつた。

「まさか、墓はかへは連つれて行ゆかないから、私わたしの許とこへ
御ご一所いっしょに。」

指ゆびして、指ゆびの先さきで、男おとこが只ひたすら瞻みりに瞻みつた瞳ひとみを、
沼ぬまの片隅かたすみに墨すみで築ついた芭蕉ばせをの蔭かげへ、觸さはつて瞬またかせる
まで、動うごかさせて、

「彼處あそこを通とほつて、岨傳そぼひたひに出でられる里さと。」

立りふさん、そんなに吃驚びっくりなさらなくても、貴下あなたが昨きの
日ふ、お醫師いしやさま様の許とこへおいでなすつた事は、私わたし最ともう知し
つて居ゐます。

何時いつかの時ときの怪我けがでねえ、まだ時々とき／＼、時じ候こうの變かはり
目めに惱なやみますから、梅雨つゆ時分じぶん、あのお醫師いしやさま様さまにお世せ

話になつたの、

私のね、今陰れて居る百

姓屋へ来て貰つて

立さんが、先刻葬式に來らしつた、此の沼の白骨も、爾時私の許で聞いて、あの方が此處へ来て拾つて行つたんです。

此の頃、又、些と鹽梅が悪いので、醫師へ通つて居ますから、今日此方へお出でなさる事も、貴下がお出掛けの直ぐあとへ行つて聞いて來ました。

先刻から、彼方此方で、様子を見て居ましたけれども、傍に人が居るから、見られるのが可厭で來ませんでしたよ。

さあ、入らつしやい。」

「 參ります！」

とだけは決然として氣競つて云つたが、膝が萎えて、がくついて、つひした事には行かないで、

「 貴女、貴女、」

とばかり言ふ。

「 まあ、何にもおつしやらないで。何事も、あの、内へ行つてから、ゆつくりお話をしませうね。」

と軽く頷く、頬がつくと、襟の處が薄く曇つて、

きらきらと露^{つゆ}が落^おちた。

其の涙を拂ふ状に、四邊を見つゝ、
 「御覽なさい、可厭な。何處より前に、沼の上が
 暗くなりました。是が、あの田の水の源なんでも
 の。又何時かの時のやうな事があつては悪い。」
 と調子はおつとり聞こえたが、是を耳にすると齊
 しく、立二は焼火箸を嚙んだやうに突立つた。

唯、佳い薫が、すつと横を抜けて通つて、其のまゝ
 後姿で前へ立つて、尋常に汀を行く。お

太鼓の帯腰が、弱々と、空から釣つたやうに、軽く、
 且つ薄い。

其處へ、はら／＼とかゝる白絹の袂に、魂を結び
 つけられたか、と思ふと、筋骨のこんがらかつて、
 捌のつかないほど、揉み立てられた身體が、自然に
 歩行く。
 足は何處を踏んだか覺えなし。

しばらく行くと、其の人が、偶と立停つて、弱腰
 を捻ぢて、肩へ、横顔で見返つて、

「氣をつけて頂戴、沼の切れ目よ。」

と案内する

處に

丸木橋が、

斧の柄の朽ちた體に、ほろりと中絶えがして折込んだ上を、水が絲のやうに淺く走つて、おのれ、化ける水の癖に、ちよろ／＼と可憐やか。こゝには葉ばかりでなく、後れ咲か、返り花が、月に咲いたる風情を見よ、と紫の霧を吐いて、杜若が二三輪、ぱつと花瓣を向けた。其の山の端に月が出た。

「今夜は私が、」

すつと跨ぐ、色が、紫に奪はれて、杜若に裾が消えたが、花から抜ける捌いた裳が、橋の向うで納まると、直ぐに此方へ向替へて、
「手を引いて上げませう。」

＝ 柵に出されたので、つい其の、伸せば達く、手を取られる。其手が消えたさうに我を忘れて、可憐い薫に包まれた。

未だ耳の底に絶えなかつた、あの、きよ、きよら、くから鳥の聲が、此の時急に變つた。野太く、圖抜けた、ばやつとした、のろまな、然も悪く底響きの

するのに變つて、

おのれら！ おのれら！

と鳴く。

ぎよつとして、仰いで見る、月影に、森なす大芭蕉の葉の、沼の上へ擡んでたのが、峰から伸出して覗くかと、頭に高う、宛然馬の鬣の如く、譬へば長髪を亂した體の、婆娑とある附元は、何うやら瘦こけた蒼黒い、尖つた頤らしくもある。

あれ／＼裂けた處が、そつくり口で、

おのれら！

と又鳴いた。其の體は薄汚れた青竹の太杖を突いて、破日の目立つ、蒼黒い道服を着に及んで、丈高う跳ばつて、天上から瞰下しながら、ひしやげた腹から野良聲を振絞つて、道教ふる仙人のやうに見えた。

其の葉が大きく上にかぶさる、下にイんで熟と見た、瞳が霑んで溜息して、

「立さん、立さん、」

と手を取つたまゝ、激ますやうに呼掛けて、

「憎らしいではありませんか。あの芭蕉が伸擴がつて、沼の上へ押覆さるもんですから、御覽なさい。出汐を恚うして隠すんですもの。空へ上れば峰へ伸る、向うへかゝれば海へ落ちて、何時見ても、此の水に、月の影が宿りません。」

可哀相に。何時かの、あの時、月の影さへ見えたらばと、どんなに二人で祈つたでせう。身につまされて涙が出る。まあ、此の沼の暗いこと！ 外は、あんなに月夜だのに。

翳せば其の手に、山も峰も映りさう。遠い樹立は花かと散り、頬に影さす緑の葉は、一枚毎に黄金の覆輪をかけたる色して、草の露と相照らす。

沼は、と見れば、此處からは一面の琵琶を中空に据ゑたやうで、蘆の葉摺れに、りん／＼と鳴りさうながら、一條白銀の絲も掛らず、暗々として漆して鼠が駈廻りさうである。

「先刻、貴下がなすつた次手に、最う些と切拂つ

て下されば可かつたのねえ。」

唯等閑に言ひ棄てたが、小松原は思はず拳を握つた。生れて以來、かよわき此の女性に對して、男性の意氣と力を未だ嘗て一度も爲に露はし得た覺がない。腑效なさも其のドン詰に

しや！ 要こそあれ。

今も不思議に片手に持つた、鞘を棄て、提げて衝と出たが、屹と見上げて、

「おのれ！」

と横薙、刃が抜けると、其のもの、長髪をざつと捌く。驚破天窓から押潰すよと、思ふに肖ず、二丈ばかりの仙人先生、ぐしやと挫げて、ぴしやりとのめずる。

是にぞ、氣を得て、返す刀、列位の黒道人に切附けると、ぐわさりと葉尖から崩れて来て、蚊帳を疊んだやうに落ちる。同時に前へ壁を築いて、轟乎と立つ青仙人を、腰車に斬つて落す。拜打、輪切、袈裟掛、はて、我ながら、氣が冴え、手が冴え、白刃と、もに、抜けつ潜りつ、勿越え、飛び交ひ、八面

に渡つて、薙立て薙立て、切伏せると、ばさ／＼と
倒れる毎に、凡そ一幅の黒い影が、山の腹へひら／
＼と映つて、煙が分れたやうに消える、と其處だけ、
はつと月が射して、芭蕉のあとを、明るくなる。

果は丘の如く、葉を重ねた芭蕉の上に、全身緑の
露を浴び、白刃に青き雫を流して、逆手に支いてほ
つと息する。

袂取りながら、其處へ来て、其の人が肩を並べた。

白刃を落して、其の時腕をさすつて憩ふ、小松原
の手を取つて、

「あゝ、嬉しい。」

と、山の端出でたる月に向つて、心ゆくばかり打
仰いだ。背撓み、胸の反るまで、影を飲み光を吸ふ
やう、二つ三つ息を引くと、見る／＼衣の上へ膚が
透き、眞白な乳が膨らむは、輝く玉が入ると見えて、
肩を傳ひ、腕を繞り、遍く身内の血と一所に、月の
光が行通れば、晃々と裳が揺れて、兩の足の爪先に、
美しい綾が立ち、月が小波を渡るやうに、滑かに襷を
打つた。

婀娜あなやと思ふと、自分の足あしは、草くさも土つちも踏ふんでは居をらず、沼ぬまの中なかなる水みづの上うへ。

今は恁いまうと、未まだ消きえ果はてぬ夫人ふじんに縋すがると、靡なびくや黒髪くろかみ、ニぼつと薰かほつて、冷つめたく、涼すずしく、たら／＼と腕かひなに掛かる。

小松原こまつばらは、俯うつむ向けに蒼沼あをぬまに落おちた處ところを、歸宅かへりのほどが遅おそいので、醫師せんせいが見みせに寄越よこした、正しやう吉きちに救すくはれた。車夫しやふは沼ぬまの隅すみの物音ものおとに、提灯ちやうちんを差出さしたしたが、芭蕉ばせをの森もりに白刃しらはが走はしる月影つきかげに恐おそれをなして、暫時しばらく様子やうすを見て居あたと言いふ。

小松原こまつばらがニ復くわいぶくして、此この話はなしをした時とき、醫學いがく一し士しは盃さかづきを擧あげて言いつた。

「昔むかしだと、佛門ぶつもんに入は入いる處ところだが、君きみは哲學てつがくを學やつと人ひとだから、其それにも及およぶまい。しかし、蒼沼あをぬまは可怪あや

しいな。
」

【完】